病棟アリス

小鳥　歌唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病棟アリス

【Ｎコード】
Ｎ６６６２Ｙ

【作者名】
小鳥　歌唄

【あらすじ】
心を閉ざしたアリスの中には、何人もの意識を持った者達が住んで居た。
多重意識症と診断をされたアリスは、医師達の提案で、中にいる意識達に体を与え、アリスの中から出す事とした。
彼等の力で、アリスの閉ざされた心を回復させていこうと考えた医師達であったが、そう思い通りにはいかず・・・。
＊大分前に書いた、同人用のスカスカ小説ｗ

＊別サイトにも記載。

プロローグ（前書き）

大分昔に同人用に書いた作品です。同人誌は結局作れなくなりましたが・・・。

プロローグ

嫌い・・・。
人は嫌い。
人は嘘を吐くから。人は裏切るから。

人は・・・嫌い・・・。

でも一人はもっと嫌い。
一人は淋しい。一人は寒い。
一人は嫌い・・・。
人は嫌い・・・。

だから私は見るのをやめた。人を・・・現実と言うこの世界を。
もう見たくないの、聞きたくないの、知りたくないの。
でも・・淋しいモノが止まらない・・・。

私だけを見てくれる人が居たなら。
私だけを求め、私だけを愛してくれる・・・そんな友達が欲しい。

そうだ・・・居ないのならば、作ってしまえばいい。
私が望む友達を、私が求める友達を、作ってしまえばいい。
そうすれば、きっともう淋しくなくなる。

頭の中の国

コツン・・・コツン・・・と、長い廊下に鳴り響く二つの足音。一人は若い男でもう一人は年老いた男。二人ともスーツの上には真っ白な白衣を羽織り、高そうな皮靴を履き廊下にその音を響かせていた。

「流石はこの街一番の大病院。内装もとても綺麗ですね。」

若い男が言う。

「何、隣街の病院に比べれば、まだまだ小さいものだよ。」

今度は年老いた男が言う。

ここはとある街にある、大きな病院だ。そしてこの二人の男は医者。若い男は新しい医者としてこの病院に招かれた。そして新しく迎え入れた医者を、医院長自らが病院内を案内している。そう、もう一人の年老いた医者が医院長だ。

「しかし、何故片田舎の町医者だった私の様な者が、こんな立派な病院に？他にも腕のいい医者は沢山居たでしょうに・・・。」

「何・・・君に頼みたい患者が居てね。」

若い医者は細々と田舎の町医者をしていたが、ある日突然この大病院の医院長自らが出向き、彼にうちの病院に来て欲しい、と申し出て来たのだ。突然の事に若い医者は驚いたが、それ以上にこんな大病院から声が掛るとはと言う感激の方が大きかった。勿論、返事は即答だった。彼だって好き好んで町医者をしていたわけではなかったから、当然と言えば当然だった。

「確か、多重意識症・・・と言う病気の女の子でしたね。」

「そうだ。彼女については、何処まで話をしたのだったかな？」

「ええ。両親を事故で亡くしてから、心を閉ざしてしまったとは聞きましたが・・・。それが多重意識症になってしまった、原因でしょうか？」

「ふむ・・・。直接の原因では無い。それはあくまで切っ掛けだよ。

」
「切っ掛け・・・ですか・・・。」
医院長は持っていた資料の束を若い医者に手渡した。
「これに目を通しておきなさい。彼女が持つ意識達について書いてある。」
若い医者は手渡された資料を軽く読みながら歩いた。
「それで、直接の原因となったモノは、何だったのですか？」
資料を読みながら質問をする若い医者に、医院長は彼の手から資料を取り上げた。
「これは後にしよう。直接の原因はね・・・人だよ。」
「人・・・ですか？」
漠然とし過ぎる答えに、若い医者は首を傾げる。
「まぁ・・・人だと言うのは分りますが・・・。」
「彼女の父親が学生監だったのは知っているかね？」
「え？あっ・・・はい。確か中でも指折りの学寮だったとか・・・。凄い方だったのですね。」
「そうだな。その父が死んでしまって、残された彼女と兄弟達はね、回りの大人達から目を付けられてしまったのだよ・・・。父親の残した数々の研究や資産、それを横取りしようと、色々な甘い言葉や嘘で誘惑をしてきて。しかし姉達がしっかりしていたからね、それが奪えないと分ると、あっけなく彼女らを見離した。」
「それは、世話をする事も、でしょうか？」
「うむ・・・。まだ幼い子供も居たと言うのに、誰も彼女達の面倒を見たがらなかったのだよ・・・。」
「酷いですね・・・。資産等が手に入らないからと言って・・・。」
医院長は深く溜息を吐いた。
「しかし問題はその後だ。ただでさえそんな大人達のせいで、心が傷ついてしまっていた彼女を、兄弟達までもが裏切ったのだから・・・。」
「兄弟達までも・・・と言いますと？」

若い医者の眉間に、少しずつシワが寄る。
「二つの家が彼女らの面倒を見てもいいと名乗り出て来たのだ。しかし、どちらも自分達の子供も居たからね。面倒を見られるのは二人だけだと言って来た。兄弟はバラバラになってしまうが、それでも子供ばかりの彼女らからしたらありがたかったのだろう。」
「それは、資産目当てとかではなく・・・ですか？」
「そうだ。しかし彼女の兄弟は、彼女を含め5人兄弟だ。どうにか一人余分に面倒を見て貰えないかと頼んではいたそうだったが・・・。」
「まさか・・・それが叶わなかったから、兄弟達は彼女を・・・。」
若い医者の眉間のシワは、これ以上は寄せられないくらいに険しくなっていた。
「余り者となってしまった彼女は、しばらくは孤児院に居たのだが・・・。その時に受けた傷が深くてね・・・いつの間にか現実を見なくなってしまったのだよ。見ない・・・と言うより、興味が無くなってしまったのかな。彼女は何時も一人で居たのだが、その時に独り言をよく言っており、そうと思うと急に笑い出したりと・・・まるで誰かがそこに居るかの様に・・・。」
「それでこの病院に。」
「うむ・・・。そして多重意識症と診断をされた。まぁ・・・診断をしたのは私なのだがね。」
医院長は自慢げに言った。白衣の襟を直しだし、褒めてくれと言うかのように、若い医者をちらちらと見る。
「流石は医院長です。まだ正確な診断が難しいと言われている多重意識症を、こんなにも早く見破ってしまうとは。確か症状が出始めたのは、まだ最近の事でしたよね？」
若い医者は医院長の期待通りに褒めたたえた。もっとも、医院長のアプローチに気付いたからと言うわけではなく、率直な感想を述べただけ、と言った感じだ。
「うむ。両親を亡くして、まだ半年も経っていないからね。」

医院長は彼の言葉に満足気だ。
「まぁまずは、患者を紹介しよう。」
一つのドアの前に立ち止まると、医院長はそのドアをノックした。ドアは鍵も何もない、前開きのシンプルなドアだった。
「入っていいかね？」
声を掛けるが返事はない。ドアノブを捻り、ゆっくりと開けると、病室の中には沢山のぬいぐるみで溢れ返っている。窓際に大きなベッドが置いてあり、その上に金髪の長い髪をした少女が腰かけていた。
「いいかな？今日は君に紹介をしたい人が居てね。さぁ、入って。」
若い医者を病室の中に入れるが、少女は彼にも医院長の言葉にも何の反応を示さない。医院長はその事を気にもせずに続けた。
「新しく君の主治医になる事になった、ドジソン先生だ。」
若い医者の名はドジソン。彼は医院長から紹介をされると、少女の近くに寄り握手を求めた。しかし相変わらず少女に反応はない。ドジソンは残念そうに差し出した手を戻した。
「ドジソン君、彼女がアリスだ。」
「はじめまして。これからよろしく、アリス。」
今度は握手を求めず、自分の中で最高の笑顔を振りまき挨拶をした。
「何の反応もないですね・・・。」
どしょっぱちからしくじってしまった様な気がしてしまい、ドジソンは深く溜息を吐いた。
「何、気にする事はないよ。彼女が何かに反応を示す時は、意識達について話をする時くらいだからね。それ以外はほとんど無反応だ。」
医院長の言葉に慰められた様に思え、ドジソンの顔に笑顔が戻る。
「さ、挨拶はこれくらいにして、私の部屋へ行こうか。」
そう言うと、医院長はドジソンを連れ、そそくさと病室を出た。
「ちょっ、医院長！まだ私は彼女と何も話をしていませんよ！」

少しだけでもアリスと話をして打ち解けようと考えていたドジソンは、突然病室の外に連れ出され不満そうに言った。
「いや、いいのだよ。どうせ話そうとした所で、何もならんし。それよりも、私が君に彼女の事を頼んだ本当の理由を説明するよ。」
「本当の理由？」
何が何やらわけの分らないまま、そのままドジソンは医院長室へと連れられて行ってしまった。

「そうね・・・若い医者だったわ・・・。でも田舎臭い・・・ふふふ・・・。」

「医院長、どういう事ですか？本当の理由とは！」
医院長室に入ると同時に、ドジソンは医院長に怒鳴る様に言った。
「まぁ少し落ち着きなさい。私はね、君の医師としての腕は勿論買っているつもりだよ。しかしそれ以外にも、君に期待をしているのだよ。」
「それ以外・・・ですと？それこそどういう意味なのですか？」
冷静に話す医院長とは裏腹に、ドジソンは興奮気味であった。
「医院長、私は全力でアリスの治療をしていきたいと思っています。ですが、治療以外の事で何か私に求めるのであれば、残念ながら私にはその期待に応えられる様なモノなど、何も持っていませんよ。」
「いいや・・・君は持っているよ。それに彼女の治療をするのは君じゃあない。君によって作られる者達だ。」
そう言うと医院長はニヤリと笑った。対してドジソンは首を傾げるばかりだ。
「治療をするのは私ではないと？私によって作られた者達って・・・もしや・・・医院長、私が以前は人形作家だった事をご存じで？」
ドジソンの自らの告白に、医院長は大笑いをした。部屋中に響き渡るくらいの大きな声で。
「はっはっはっはっ！いやぁ・・・失礼。まさか君から人形作家だ

った事を告白してくれるとは。いやね、私も正直半信半疑だったのだよ。噂で聞いた程度だったのでね。」
医院長の言葉に、ドジソンは顔を真っ赤にした。
「噂で・・・ですと？そんな確信も無いのに、私を雇ったのですか？」
「いやぁ、仮に違っていたとしても、君の医師としての腕を認めていたのは確かだよ。まぁだから、その時はただの医者として、君に働いて貰うつもりだったのだがね。」
はぁ・・・と深く溜息を吐いき、体中の力が抜ける程に呆れたドジソンだったが、取り合えずは最後まで話を聞こうと思った。しかし話を聞けば聞く程、それは余にも馬鹿馬鹿しく思え、呆れる、を通り越す程呆れてしまった。
「そんな事は馬鹿げています！私の作った人形の中に、彼女の他の意識を入れるだ何て・・・そんな事は不可能です！」
そう、医院長の計画は、アリスの中に存在する意識達に、体を与えると言う事。そしてその体と言うのは、ドジソンの作る人形であった。
「ドジソン君、知っているように彼女は現実から目を逸らし、自分の中に居る意識達としか会話をしない。そのせいで我々医師とも全くと言っていい程、話をしてはくれないのだよ。だから治療をしようにもする事が出来ない。しかしだね、唯一彼女と対等に会話の出来る彼等が、彼女の中ではなく、外に居たとしたら・・・我々にも入り込める余地があるのではと考えているのだよ。そしてそこから、治療に繋がるともね。」
アリスを紹介された時の事を思い出すと、医院長の言う事は分らなくもないドジソンだった。しかしそれ以前の問題が頭を埋め尽す。
「しかし医院長、どうやって意識達を人形に移すと言うのですか？」
ドジソンの疑問に、医院長は意外にも簡単に答えた。何の問題も無いと言う様に。
「何、簡単な事だよ。アリスは意識達の事となると、少しだけだが

私と話してくれる。だから直接彼女から頼んで貰うのだよ。」
「直接彼女から・・・ですか？そんな事で、本当に意識達は人形に移る事が出来るのですか？」
「出来るとも。君は憑依、と言う言葉を知っているかね？」
「ええ・・・聞いた事はあります。確か東洋の方で使われている言葉だったと・・・。」
「流石、君は優秀だ。」
そして医院長はまた、大声で笑った。
「簡単に言うとだね、霊が人間に乗移ると言う事だ。それらは自らの意思で人間に乗移り、離れる事も出来る。それぞれの意思を持つ意識達にも、同じ事が出来るのではと考えているのだよ。」
「意識達も霊と同様の存在と？」
医院長は無言で深く頷いた。
「確かに、彼等は意思を持つ人格とはまた違い、あくまで意識だ。確立された人格と違って、あやふやな存在でもあるわけだから・・・基盤であるアリスが願えば、何時でも消してしまえる程に・・・しかしだからと言って体を移す事は本当に可能なのか・・・？」
ぶつぶつと言いながら悩むドジソン。そんな彼を余所に、医院長はソソクサと机の引き出しから、鍵とファイリングされた紙の束を取り出した。そしてそれらをドジソンの目の前に差し出した。
「これは人形の設計図だ。彼女から聞いた意識達の形を基盤にしている。それからこれは、君が人形を作る為に用意された部屋の鍵。鍵は一つしかないから、誰にも邪魔をされずに作れると思うよ。」
まだ納得も数々の疑問の解決も無い間に、ニコニコとしながら差し出してくる医院長。これはｙｅｓとしか答えられないのだと悟り、ドジソンもまたニコニコとしながら受け取った。
「医院長・・・私はこの病院に来たのは、間違いだったと痛感します・・・。」
がっくりと肩を落としながら、ドジソンは医院長室を後にした。

「さてアリス、今日は君にとても大切な話があるのだよ。」
ぬいぐるみに埋もれながらベッドに横たわるアリスに、医院長は言う。
「君の中に居るお友達の事だ。」
それまで何の反応も興味も示さなかったアリスは、その言葉を聞くと微かに唇を動かす。
「もしも君の友達に、君とは別の体があったら、素晴らしいとは思わないかね？」
動くだけの唇から、今度は声が漏れる。
「どういう意味？」
とても小さな声で言う。その言葉に、医院長はニヤリと笑った。
「ふむ・・・興味があるようだね。しかしそれには、君の協力が必要なのだが・・・。」
焦らす医院長に、アリスは苛立ちながら言った。
「協力してあげるから、早く言って。」
医院長の顔は、思惑通りと言った感じだ。
「ふむ。君の協力があれば、何の問題もない。」
そしてドジソンに話した事と同じ様な事をアリスにも言い、彼が今その人形を作っていると言う事を伝えた。それらが治療の一環と言う事以外。ドジソンと違い、アリスは何の疑問も抱く事なく話を受け入れ、ただ一言・・・。
「だったら早く作って。」
と言うだけだった。
「それでは次の質問だ。その中で最も仲のいいのは、誰かね？」
「そうね・・・うさぎかしら。私の言う事何でも聞くから、楽だわ。」
アリスの言う一言一言を、医院長はしっかりとメモを取りながら聞く。
「では、一番初めに体に入れてあげるのは、そのうさぎかな？」
「多分ね・・・。」

段々と面倒くさくなってきたアリス。それでも医院長の質問は、まだ終わらない。
「ふむ。ではその次に体に入れてあげたい友達は誰かな？」
「さあね。その時にならないと分からないわ。」
ますますやる気を無くすアリス。そんなアリスの気を引こうと、医院長は必死に彼女の食い付きそうな話を捜した。
「あぁ・・・そうだ、そのお友達は男の子ばかりなのかな？話を聞いていると、女の子の話が全くないのだが・・・。」
女の子、と言う言葉に、アリスは少し反応を示した。
「一人居る・・・。でもあまり好きじゃないのよ。」
これは、と思い、医院長は、今度はその女の子について聞き始めた。
「どうして好きではないのかね？女の子同士なら、話も合うだろうに。」
するとアリスは、とても不機嫌そうな顔をして言う。
「あの子、偉そうなんだもん。私より態度が大きいのよ！」
そう言うと、すねる様にぬいぐるみの中へと顔を潜らせた。
「あぁ・・・そうなのか。だったら、その子の体は作らない方がいいのかな？」
少し困った様子で聞く。しかしアリスの返答は・・・。
「別に・・・誰も作っちゃダメだ何て言ってないでしょう。」
と、先ほどとは裏腹の返事。
「じゃあ、作ってもいいのだね？」
「・・・いいわよ。あの子には、直接文句言ってやりたいし・・・。」
照れながら言うアリスに、医院長はニコニコと笑った。
「はっはっはっ・・・。本当は、その子の事も好きなのだね。」
医院長の言葉に顔を真っ赤にしたアリスは、嬉はずかし、といった感じだ。
「ちっ・・・違う！別に好きじゃない！ただ文句言ってやりたいだ

けよ！まっ・・・まだ、猫の方が好きよ。」
「はて、猫？」
「そっ、そうよ。猫は甘えん坊だし我儘だけど、一応、私の言う事は聞いてくれるから・・。」
もそもそとぬいぐるみの山から頭を出しながら言った。
「そうか・・・ならばうさぎの次に体に入れてあげるのは、その猫君かな？」
「多分・・・そうじゃないの・・・。」
またも照れくさそうにアリスは言う。
「ふむ。よし、それならば先にうさぎと猫君の体を作ってしまう様、ドジソン君に伝えておこう。」
そう言い残し、医院長はソソクサと病室を出て行ってしまった。
また一人病室の残されたアリスは、茫然とした感じでベッドに横たわる。
「何よ・・・聞くだけ聞いてさっさと出て行って・・・。本当に勝手な医者ね。」

狂った友達

「くそっ・・・重いな・・・。医院長も少しは手伝ってくれればいいのに。」
ガラガラと、大きな箱を積んだカートを引くドジソン。その大荷物は、アリスの病室へと向かっていた。
「アリス君、入るよ。」
病室に辿り着くと、一言声だけを掛け、重いカートを病室へと詰め込んだ。
「ご覧よ、君の友達の体が出来たんだ。」
嬉しそうに箱をゆっくりとカートから下ろすドジソン。そんな彼を、相変わらず無関心で見つめているアリスだったが、箱のフタが開くと同時に、体を少し乗り上げて覗き込んだ。
箱の中には、白い肌をした美しい男の子が入っていた。凛々しい燕尾服を着ており、まさにアリスに仕える為に来た、と言った感じだ。そしてその頭からはうさぎの耳らしき物が、ひょっこりと二本、飛び出している。
「これは何？」
その耳を不思議そうに見つめて聞くアリス。ドジソンはニコニコとしながら言った。
「うさぎの耳だよ。君の中のイメージ通りに作ってみたのだけどね。気に入らなかったかい？」
とても満足気に言ってくるドジソンを見ると、文句を言うのは余りに可哀想だと少し思え、アリスは無言で首を振った。
「よかった。気に入ってもらえて。私の自信作なんだよ。」
ドジソンはさらに顔をニコニコとさせた。
「じゃあ、彼はここに置いて行くね。医院長先生から、中に入れる時はアリス君一人の方がいいと言われているから。」
「そうね、そうしてちょうだい。」

そっけなく言うアリスを背に、ドジソンは病室を後にした。

アリスは箱に入ったうさぎの髪をそっと撫でると、額に手を置き、ゆっくりと目と閉じた。そして優しく呟いた。

「さぁ・・・出てらっしゃい。貴方の体よ・・・この中に・・・入りなさい・・・。」

言い終えると同時に、アリスの体は淡い光に包まれた。そしてその光は、腕から手へと渡り、うさぎの体へとゆっくりと移って行く。今度はうさぎの体が光に包まれたと思うと、それは次第に消えていった。

「本当に・・・移ったのかしら？」

少し不安そうにうさぎの顔を覗き込むと、ピクッと微かに耳が動いたのが見えた。そして閉ざされたうさぎの目がゆっくりと開く。その瞳は赤く、宝石の様に輝いていた。

「こんにちは、アリス。」

うさぎはニコリと笑い言った。そして重そうに体を起こす。

「貴方・・・本当に私の中に居たうさぎなの？」

目の前の人形が動き、言葉を発する事に戸惑いながらも、どこか嬉しそうに言うアリス。

「そうだよ。僕はアリスの中に居たよ。でもこうしてアリスと会えるなんて、凄く嬉しいな。」

嬉しそうにニコニコと笑いながら言ううさぎに、アリスは険しい顔をして言った。

「僕・・・？貴方・・・・私の中では男の子だったわよね？今も男の子なの？」

「男の子だよ。アリスの中からそのまま出て来たんだから。」

嬉しそうなうさぎに対し、アリスはムッとした顔で言った。

「嘘よ！貴方、女の子でしょう？」

突然のアリスの言葉に、うさぎの顔はキョトンとする。

「何言ってるの？アリス。僕はちゃんと男の子だよ。」

「嘘よ！だって貴方、どう見ても女の子の顔をしているじゃない！」
更なるアリスの言葉に、うさぎは困った様子で言う。
「え・・・それは・・・僕の体を作った人が、こう言う顔にしたから・・・。」
「おかしいわ！女の子なのに燕尾服を着ているなんて。着替えて！」
アリスはうさぎの言葉をさえぎり、強い口調で言った。
「着替えるって・・・僕、洋服はこれしか持っていないよ・・・。」
弱々しく言ううさぎに、アリスはまたも強い口調で言った。
「私の洋服があるわ！」
そう言うと、自分の衣装ダンスをあさり出し、一着の白いワンピースを引っ張り出した。
「これを着なさい。」
ワンピースをうさぎに突き付けると、うさぎはそれを受け取り、広げた。
「これ・・・スカートだよ？男の子がスカートって・・・。」
困った顔をするうさぎに対し、またもムッとして、アリスは更に強い口調で言う。
「この洋服に着替えなさい！今すぐ！これは命令よ！」
怒鳴る様なアリスの言葉に一瞬ビクッとなるうさぎだったが、すぐにニッコリと笑い言った。
「分かったよ。アリスがそう言うなら、そうするよ。それでアリスが喜ぶなら。」
そう言うと、うさぎは後ろを向き、着ていた燕尾服を脱ぎ捨てて行く。
「ふぅ～ん・・・意外と素直なのね。」
着替えるうさぎをジッ見つめながら言うアリスに、うさぎは恥ずかしそうに、ぬいぐるみの山の中へと隠れて着替え出す。
「僕はアリスが望む事なら何でもするし、アリスが言う事なら何でも聞くよ。それでアリスが嬉しいなら、僕も嬉しいし、アリスが楽しいなら、僕も楽しいから。」

着替えながら言ううさぎに、アリスは首を傾げて聞いた。
「どうして？」
と一言。その問いに、うさぎは嬉しそうに答える。
「アリスの事が、大好きだからだよ。」
着替え終えたうさぎは、ぬいぐるみの山の中からゆっくりと出てきた。
「どう・・・かな？」
照れ臭そうに言ううさぎ。アリスは白いワンピースに包まれたうさぎを見て、嬉しそうにハシャギながら言った。
「いいわ！とても似合っている。やっぱりさっきの陰気臭い燕尾服よりも、こっちの方が絶対いいわ！」
嬉しそうなアリスを見て、うさぎも嬉しそうに笑った。
「そうだわ！忘れない内に、あれもしておかなくちゃ。」
思い出したかの様に、パンっと両手を叩くと、アリスはまたも衣装ダンスの中をあさり出す。
「あれ・・・って・・・？」
不思議そうにアリスを見つめるうさぎだったが、その顔は一瞬で固まった。アリスが取り出した物によって。
「これよ。」
ニッコリと微笑みながらアリスが手にしていた物は、長い鎖の付いた、首枷であった。
「最初にうさぎの体が来ると聞いて、すぐに用意をしたの。さぁ、早くこれを付けなさい。」
微笑みながら首枷を突き出して来るアリスに、うさぎの耳は怯えた様に垂れ下がる。
「どうして・・・そんな物を付けるの？」
震えた声で言ううさぎに対し、アリスは嬉しそうに言った。
「決まっているでしょ？逃げない為よ。うさぎはすぐに何処かへ逃げてしまうって言うから。」
「そんな物付けなくても、僕は何処へも行ったりしないし、アリス

から逃げたり何てしないよ?ずっとアリスと一緒にいるよ。」
必死に訴えるうさぎとは裏腹に、アリスはまたしても強い口調で命令をする。
「私の言う事が聞けないの?付けなさいって言っているの!」
うさぎは何も言わずに、そっと首枷を手にすると、それを自分の首へガチャッと付けた。
「これで、いいかな?」
そうしてニコリと笑って言った。
「ふふふ・・・これでいいわ!これで逃げられない!貴方はずっと私の側に居てくれる。」
アリスは嬉しそうに笑いながら、その場でクルクルと回った。その度に鎖が引っ張られ、うさぎの首もまた引っ張られていく。
「うっ・・・痛いよ、アリス・・・あっ・・・。」
勢いよく鎖が引っ張られると、そのままうさぎの体も強く引っ張られ、ドタッと床へと倒れ込んでしまった。それを見たアリスは鎖をゆるめ、うさぎの元へと駆け寄った。
「ごめんなさい。ハシャギ過ぎてしまったわね。」
優しくうさぎの体を起してあげると、ニコニコと笑いながらうさぎの頭を撫でた。
「平気だよ、これくらい。アリスが楽しいのなら、いいよ。」
うさぎは嬉しそうな顔をして言った。
「貴方、本当にいい子ね。」
そう言うと、アリスはうさぎの頬に手をそえる。
「柔らかいわ・・・。それに温かい・・・。」
その手は頬から首筋へとなぞる様に下がり、ゆっくりと太股に置かれた。
「貴方・・・何で出来ているの?人形の材料って・・・土?それともレンガと同じなのかしら?・・・あぁ・・・あれも元は土だったわね・・・。」
太股に置かれた手は、スルリとスカートの中に入って行く。

「ア・・・アリス・・・。ダメだよ、そんな所触っちゃ・・・。」
顔を真っ赤にして、これ以上アリスの手がスカートの奥へと行かない様、うさぎは必死にアリスの手を押さえ付けた。
「手を離しなさい。何で出来ているのか確かめているんだから。」
「でも・・・。」
アリスがうさぎを睨み付けると、うさぎはそっと手をどかした。
「いい子ね。」
ニコリと笑い、アリスの手はそのまま奥へ、奥へと進んで行く。そしてそのままスカートをめくり上げ、もう片方の手でうさぎの方足を、グイッと大きく持ち上げた。
「アリス・・・はっ・・・恥ずかしいよ・・・こんな格好・・・。」
うさぎは恥ずかしそうにうつむいた。しかしアリスはそんなうさぎを気にもせず、持ち上げた足の太股に顔を近づけ、頬をピタリとくっ付ける。
「温かいわ・・・。本物の人間の肌の様・・・。こんなにもスベスベだし。」
そしてもう片方の手で、何度もうさぎの太股をさすった。
「アっ・・・アリス・・・。くすぐったいよ・・・。」
「そう言えば、貴方さっき痛みを感じたわよね？感覚もちゃんとあるのね・・・。」
そう言うと、今度は強く太股を握った。
「痛っ！痛いよ・・・。」
「痛い？やっぱり痛みを感じるって事は、感覚があるのね。本当に、何で出来ているの？」
「ぼっ・・・僕にもよく分からないよ・・・。僕を作った人に聞いてみたら？」
「ドジソン先生に？」
アリスは持ち上げていたうさぎの足を、パッと離すと、そっけなく言った。
「別にいいわ。そんなに話したい相手でもないし・・・。」

うさぎはソソクサとめくれ上がったスカートを直す。不機嫌そうにするアリスの顔を見て、不安気に聞いた。
「その・・・ドジソン先生の事・・・アリスは嫌いなの？」
「別に・・・嫌いって訳じゃないわ。ただ興味が無いだけ。」
「そう・・・。」
しばらくの間、沈黙が続いた。

コンコン、と静まり返っていた病室に、ノックをする音が響く。
「誰か来たみたいだよ？」
沈黙が破られたノックの音は、うさぎにとってはありがたい物であった。このままお互いに何の言葉を交わさないで居続けるのは、アリスにとっては何と言う事もないが、うさぎにとっては少し寂しい物があったから。
「アリス君、入るよ？」
ノックをしたのはドジソンだ。ドジソンは何の応答も無い事に、既に慣れたと言った感じで、そのままドアを開け病室へと入って来る。そして赤い目をパチパチとさせるうさぎの姿を見ると、とても嬉しそうに言った。
「これは・・・成功したのだね！ハハハっ！凄い！凄いや！本当に、僕の作った人形の中に入ったのか！」
そのまま一直線にうさぎの元へと駆け寄ると、そっと頬に手を当てようとした。その瞬間、うさぎはビクッと怯えた様に体をそらす。
「あぁ・・・ごめんよ、驚かしてしまったね。初めまして、私は君の制作者だよ。」
優しく言うドジソンに、うさぎもまだ少し怯えながら挨拶をした。
「はっ・・・はじめまして・・・。」
うさぎが言葉を発すると、ドジソンは更に嬉しそうに言う。
「ハハハっ、凄いや！アリス君、一体どうやって人形の中に彼を入れたのだい？」
はしゃぐドジソンとは真逆に、アリスは冷めた口調で言った。

「別に・・・たいした事は何もしていないわ。ただその子が自分から移っただけよ。」
「そうか、よくは分からないけれど、とにかく凄い！医院長先生の試案は成功だ！・・・ん？これは・・・？」
　と、ドジソンはうさぎの首に付けられている枷に気が付くと、長い鎖を手に取った。
「こっ、これは！僕が付けたんだ。付けてって、アリスに頼んだんだ。」
　うさぎは焦りながらも、何とか誤魔化そうと、必死に訴えた。これがアリスの命令で付けていると知られれば、アリスが責められてしまう、そう思ったから。
「ふん・・・そうか・・・。君は変わった趣味をしているのだな・・・。記録をしておこう。」
　ドジソンはうさぎの言葉を疑う事も、疑問に感じる事もなく、ソソクサとポケットからメモ帳を取り出し、何やら書き始める。そんなドジソンとうさぎのやり取りを、アリスは冷めた目で見ていた。
「それより先生。何の用？確認をしに来たのなら、もう済んだでしょ。早く出て行って。」
　冷たくあしらうアリスに、ドジソンは少し困惑をした様子で言う。
「あっ・・・ああ。確認もあるのだけれども・・・その、もし本当に移って人形が動いていたら、そのお祝いにと思って・・・。いやっ、人形が動いたお祝いではないよ、君に新しく友達が出来たお祝いだ。」
「・・・それで？」
「ああ、そのお祝いに、ケーキを持って来たのだよ。君が甘い物が好きだと聞いたからね。」
　そう言うと、ドジソンは廊下に置いてあったカートを病室の中へと運んだ。いつももならその上には、ガーゼや消毒液、と言った医療道具が乗せられているが、今日は大きな生クリームたっぷりのショートケーキワンホールと、いい香りを放つ温かい紅茶、それにテ

ィーカップ2つが乗せられていた。
「ほら、美味しそうだろ？二人で食べなさい。」
ドジソンはニコニコとカートをベッドの前へと置いた。
「わぁ！いい香り。ありがとう、ドジソン先生。」
うさぎはとても嬉しそうに言う。
「どうもありがとう。頂くわ。」
アリスは相変わらず、そっけなく言った。
「それじゃあ、私は二人の邪魔をしては悪いから、もう出て行くよ。」
そう言い残し、ドジソンは病室を後にした。うさぎは嬉しそうに、ヒラヒラとドジソンに手を振って見送る。アリスは床からベッドへと座り直し、ニコリと笑って言った。
「うさぎ、こっちへいらっしゃい。」
うさぎは言われるがまま、アリスの元へと近づき、隣へと座ろうとした。するとアリスは。
「違うでしょ？貴方は床に座るの。」
アリスは床に向かって指をさすと、うさぎは指のさされる所へと座りこむ。
「ここでいいのかな？」
ニコリと笑い見上げるうさぎ。アリスもニコリと笑う。
「いい子ね。さっきはどうして、その首枷を自分から付けたと言ったの？」
「え？だって、アリスが付けたって分かったら、アリスが怒られてしまうと思ったから・・・。」
「そう・・・私を庇ってくれたのね。ふふふ、いい子のうさぎにはご褒美をあげるわ。」
アリスは嬉しそうに笑った。
「本当？僕、嬉しいなぁ。」
うさぎも嬉しそうに笑う。
「私がケーキを食べさせてあげるわ。」

そして右手でおもむろにケーキをわし掴みすると、それをうさぎの目の前に差し出した。
「さぁ、お食べなさい。」
ニコニコとしながら手に掴んだケーキを指し出して来るアリス。うさぎはニコリを笑い、アリスの手からケーキを食べ始めた。
「ふふふふ、美味しい？」
顔じゅうクリーム塗れになりながら、うさぎは一生懸命にケーキを口にする。
「ほら、ちゃんと残さず食べなさい。クリームがまた指に残っているわ。」
うさぎは言われるがまま、手に付いたクリームも隅ずみまで舐めた。
「このケーキ、とても美味しいよ、アリス。」
嬉しそうに、クリーム塗れで言ううさぎ。アリスは自分の指に付いたクリームをペロリと舐めると、うさぎの顔に自分の顔を近づけた。
「顔じゅうクリーム塗れね。ふふふっ。」
そしてうさぎの顔に付いたクリームを、ペロペロと舐め出す。
「フフッ・・・アハハッ。くすぐったいよ、アリス。」
アリスに顔を舐められる度に、こそばゆそうにクスクスと笑う。
「喉が渇いたでしょう？紅茶をあげるわ。」
今度は紅茶の入ったポットを手に取り、ティーカップには入れず、そのまま上からうさぎの顔へと注ぎ込む。
「あつっ！熱いよ！アリス！」
うさぎは思わず顔を避けてしまう。
「何してるの？さぁ、飲みなさい。」
容赦なく注ぎ込むアリスに、うさぎは大きく口を開けて、上から流れて来る紅茶を受け止めた。ゴク、ゴク、と口からこぼれながらも飲み込む。いつの間にか、うさぎの洋服と床は、ビチョビチョに濡れてしまっていた。

「やだ・・・部屋が汚れてしまったわ。」
アリスはポットをカートの上に置くと立ち上がり、タンスの中からバスタオルを取り出した。そしてバスタオルで、紅茶塗れの床を拭き始める。
「あっ、アリス。そんなの僕がやるよ。」
アリスの持っていたバスタオルを取ろうとするが、その手は振り払われる。
「いいの。私が汚したんだもの、私が綺麗にするわ。貴方も後で、私が綺麗にしてあげる。」
うさぎは不思議そうにアリスを見つめた。意地悪な事をし出したと思えば、突然優しく真面目になるアリスの行動が、よく分らなかった。一生懸命に床を拭くアリスを見て、うさぎもタンスの中からバスタオルを取り出し、一緒に床を拭き始めた。
「僕も手伝うよ。僕もアリスと遊んでて汚してしまったんだから。」
優しく笑いかけて言ううさぎに、アリスは嬉しそうに言った。
「ありがとう。」

痛い愛

「どうだね？アリスの様子は？」
医院長室の大きな椅子に座り、目の前に山積みにされた書類に印をポンポンと押しながら、医院長は言う。
「はい。転移は成功でした。最近は病室の前を通ると、笑い声が聞こえてくるのですよ。」
嬉しそうに答えるドジソン。アリスのその後の経過報告の為、医院長室に呼ばれていた。
「そうか・・・。それは非常にいい事だ。この調子で、彼女の中の意識達を外に出し、他の者との接触に慣れて行けば、通常の人間に対しても難なく接する事が出来る様になるかもしれんな。」
医院長はドジソンの顔をチラチラと見ながら、書類に印を押し続けて言った。
「そうですね。そして沢山の物に興味を示してくれる様になれば、更にいいですね。」
ドジソンは退院をして行くアリスの姿を想像しながら、ニコニコと言う。
「まぁまだこの治療は始めたばかりだ。肝心なのは、これからだよ。」
「はいっ。分かっていますとも！」
任せて下さい、と言わんばかりに、ドジソンは大きく自分の胸を叩いた。
「それで？ドジソン君。次の体は、もう出来たのかね？」
「あっ・・・はい。後は病室に運んで、またアリス君に意識を移して貰うだけです。」
「そうか、それは素晴らしい。君は本当に優秀だね、仕事も早いし。それならば、早くその体をアリスの所へ持って行ってあげなさい。」
そう言うと、押し続けていた手を止め、横に置いてあったコーヒ

ーをすすった。
「あの・・・医院長先生・・・。」
「ん？何だね？何か問題でも？」
ドジソンは少し言いにくそうに、頭を掻きながら言う。
「いえ・・・実は、あの人形を病室まで運ぶのに、一人ではとても大変で・・・。よろしければ手伝って貰えないかと・・・。」
その言葉を聞くと、医院長は飲んでいたコーヒーを机に置き、セカセカとまた印を押し始める。
「なっ・・・何を言っているのだ。見て分からんのかね？この通り、私はとても忙しいのだよ！」
「は・・・はぁ・・・。そのようですね・・・。」
やはり手伝う気はさらさら無いのか、と思いながら、ドジソンは医院長に一礼をして、部屋を後にした。
「はぁ・・・。またあの重たい人形を、一人で運ぶのか・・・。せめて看護婦の人にでも手伝って貰えればいいのだが・・・。この計画は私と医院長だけの秘密の計画だからなぁ・・・。」
トボトボと肩を落としながら、ドジソンは人形の置いてある製作室へと向かった。

病室では、相変わらずアリスはうさぎに意地悪ばかりをしていた。
「さぁ、早くしなさい。」
今度のアリスの命令は、うさぎに四つん場になれとの事。それで鎖を引いて、病室内を散歩しようとしていたのだ。
「これでいい？アリス。」
うさぎも相変わらず、ニコニコと笑いながらアリスの命令に従う。
「ええ、それでいいわ。さぁ、いらっしゃい。」
アリスが鎖を引くと、それに合わせてうさぎは四つん場のまま歩きだす。
「ふふふ。ほら、もっと早く歩いて！」
グイグイと鎖を引っ張るアリス。うさぎはズルズルと引きずられ

ながら歩いた。と、そんな中、トントンとドアをノックする音が聞こえる。
「誰よ？人が楽しく遊んでいる時に・・・。」
不機嫌そうな顔をしながら、手に持っていた鎖を離すと、ドアの方へと向かった。ガチャッとアリスがドアを開けると、そこにはニコニコと微笑みながら立つドジソンの姿が。
「やぁ、アリス君。よかった、君がドアを開けてくれて。あっ、そのままドアが閉まらない様に、抑えていてくれないかい？」
アリスは言われるがまま、ドアを抑えた。
「何か用？先生。」
「いやね、新しい体が出来上がったから、持って来たのだよ。ほら、君の新しい友達の・・・。」
そう言いながら、ドジソンはまたも重そうにカートを病室の中へと運びこむ。それを見たうさぎは、ドジソンの元に駆け寄り、一緒にカートを押した。
「手伝います。」
「あぁ・・・ありがとう。助かるよ。」
二人で病室に運び込むと、次はその上に乗っていた大きな箱を、せーの、でカートから下ろす。ドンッと言う音と共に、勢いで箱のフタが少し開いた。
「おっと・・・危ない危ない・・・。」
ドジソンはそっとフタを開けて、中身が壊れたりはしていないかを確認した。
「うん。大丈夫だな。」
フタの開いた箱の中を、アリスとうさぎは覗き込んだ。アリスはまたも首を傾げる。
「また・・・耳？」
箱の中に入っていた次なる人形は、ピエロの様な黒い服を着て、首には鈴をぶら下げている。そして頭からはまたもひょっこりと、猫の様な耳が二つ。お尻からは、長いシッポの様な物が飛び出して

いた。
「猫だよ。君の言っていたチェシャ猫。どうだい？」
ニコニコと言うドジソンに、アリスは溜息を吐きながら言った。
「はぁ・・・だからシッポ付きなのね・・・。別に、こう言うのって必要ないんじゃない？」
「いやぁ～。少しでも君のイメージ通りって思うと、どうしても付けてしまうのだよ。あっ！うさぎ君は、どうだい？」
ははははっ、と笑いながら、ドジソンはうさぎに聞いた。うさぎは目をキラキラとさせながら、チェシャ猫を見つめている。
「あっはい。いや・・・僕もこうやってアリスの所へ来たのかって・・・何か感動して・・・。」
うさぎの言葉に、ドジソンはとても嬉しそうだ。
「そうか、そうかい。そうだね、君は目を覚ます前の様子は、分からなかったからね。」
二人して楽しそうに話す姿を見て、アリスはムッとした顔をする。
「先生！もう運び終えたのなら、早く出て行って。この人形の中に移せないわ。」
ムスッとした顔で言うアリスを見て、ドジソンはハッとした顔をして言った。
「ああ！そうだったね。移す時は席を外した方がよかったのだったね。じゃあ私はこれで失礼するよ。また何か困った事等があったら、何時でも言って来なさい。」
そうしてドジソンは病室の外へと出て行った。うさぎは相変わらずニコニコと笑いながら、ドジソンを見送る。そんなうさぎに、アリスはうむも言わずに思い切りうさぎの頬をバシッ、と叩いた。
「あうっ！」
うさぎは痛そうに、叩かれた頬に手を当てる。うさぎの頬は少し赤くなってしまっていた。
「私以外の人と、楽しそうにしないで！」
アリスはうさぎに怒鳴りつけると、うさぎは耳を下に垂らしなが

ら謝った。
「ごっ・・・ごめん・・・アリス・・・。僕、そんなつもりじゃなかったんだ・・・。」
今にも泣き出しそうな顔をしているうさぎ。そんなうさぎを見て、アリスは叩いた頬にそっと手を添えた。
「ごめんなさいね。痛かったでしょう？でも、貴方が悪いのよ。ドジソン先生と、あんな楽しそうに話すから・・・。」
うさぎはプルプルと首を横に振りながら、大粒の涙を溢れさせた。
「泣かないで。もうぶったりしないから。その変わり、貴方も私以外の人と仲良くしてはダメよ。」
優しく言うアリスに、うさぎは泣きながらコクコク、と何度も頷いた。
「ふふ、いい子ね。さぁ、涙を拭いて。新しいお友達を起してあげなくちゃ。」
ニコリと笑いながら言うアリスに、うさぎも涙を拭きながら、ニコリと笑った。

アリスはうさぎの時と同様に、箱に入れられた猫の耳を持つ人形の額に、そっと手をかざした。そして心の中で呼びかけると同時に、又もアリスの体からは淡い光が。うさぎはその様子をじっと静かに見つめている。
「さぁ・・・起きなさい・・・チェシャ猫・・・。」
アリスの呼びかけと共に、ゆっくりとチェシャ猫の目は開く。目を開けたチェシャ猫の瞳は美しい金色に輝いており、パチパチと何度も瞬きをする。
「ここは・・・外か？」
不思議そうに周りを見渡すと、アリスを見るやいなや、突然飛びきりの笑顔でアリスに抱きついた。
「アリス！アリスなんだね！やっと会えた！」
突然の事に驚いたアリスは、思わずチェシャ猫を振り払った。

「ちょっと！いきなり何をするの！」
そんなアリスにはお構いなしに、チェシャ猫はまたもアリスに抱きつく。
「だって嬉しいんだもん！こうして直接アリスに会えたのが！ハハハッ。」
そんなチェシャ猫を見て、うさぎはチェシャ猫からアリスを引っ張り離した。
「アリスが嫌がっているじゃないか！止めろ！」
するとチェシャ猫は先程の態度とは一転して、冷たくうさぎに言い放つ。
「五月蠅いな・・・お前には関係無いだろ。俺とアリスの感動の対面を、邪魔するなよ。」
「で・・・でも・・・。」
困った顔をするうさぎに対し、険しい顔をするチェシャ猫。しばらくはそんな両者の睨み合いにも似た時間が続くが、アリスの言葉にその時間を終える。
「いい加減にしなさい！二人とも！新しく迎えた友達よ！誰にとっても。仲良く出来ないのなら、ここから出て行きなさい！」
二人はアリスが言うなら、と言った感じで、お互いに睨み合いを止めた。
「チェッ！アリスが言うなら・・・仕方ないな。」
「ごめんね・・・アリス・・・。僕ちゃんと仲良くするから・・・。」
二人の言葉にアリスはニッコリと笑い言う。
「それならいいわ。さぁ！新しくお友達を迎えた、お祝いをしましょう！」
そう言うと、アリスはいそいそと病室の隅に追いやっていたテーブルと椅子を部屋の真ん中に運んで来ると、ティーセットの用意をした。
「美味しい紅茶で乾杯でもしましょう。ドジソン先生から頂いた紅

茶が、まだ残っていたから。」
　ニコニコと機嫌良さそうに支度をするアリスに、うさぎはその手伝いをする。チェシャ猫は運ばれた椅子にドカリと座り、目の前に紅茶が差し出されるのを嬉しそうに待っていた。
「君も手伝いなよ。」
　不満そうにうさぎが言うが、チェシャ猫はそれを無視するかの様にアリスに話しかける。
「ねぇアリス！紅茶だけじゃ味気ないよ。何かお菓子でも無いの？」
「そうね・・・それもそうね。確かクッキーがあったはずよ。それも出しましょう。」
　アリスはいそいそとタンスの引き出しからクッキーの入った缶を取り出し、それもテーブルへと置く。
「アハハ！ウマそうだ！」
　はしゃぐチェシャ猫を見て、うさぎは更に不満そうな顔をした。
「さぁ、うさぎもこっちへいらっしゃい。」
　しかしアリスにそう呼ばれると、今度は嬉しそうな顔をしてアリスの元へと行く。うさぎも椅子に座ろうとすると、アリスではなくチェシャ猫がうさぎを突き飛ばした。
「お前は椅子に座るな。」
　強い口調で言うチェシャ猫に対し、うさぎも又強い口調で言う。
「どうしてだよ？アリスの命令でも無いのに・・・君の言う事なんか聞けないよ！」
　そうしてまた二人の喧嘩が始まってしまうのだった。
「お前、首輪を付けてるだろ。って事はアリスのペットだ！なら俺のペットでもあるから、俺の言う事もちゃんと聞けよ。」
「違う！僕はアリスの友達だよ！アリスが喜ぶ為にこうしてるんだ！お前の言う事を聞く義務は僕には無いよ！」
「うさぎの癖に偉そうな事言うなぁ。ムカつくよ。お前はアリスの友達じゃなくて、おもちゃなんだよ！」
「違うよ！僕はアリスの友達だよ！後から来た癖に・・・君だって

偉そうな事言うなよ。」
　そんな二人の言い争いを見て、うんざりとした顔をしたアリスは、テーブルに用意をしてあった紅茶やクッキー事テーブルを引っ繰り返した。
「五月蠅い！五月蠅いわよ！せっかく私がお祝いをしようと用意をしたのに・・・。それを無視して二人でお話をして・・・。もういいわ！」
　そう言い放つと、アリスはベッドの中へと潜り込んでしまった。
「ア・・・アリス・・・。」
　申し訳なさそうにアリスの元へ行こうとするうさぎをチェシャ猫は突き飛ばし、ベッドの中のアリスへと飛び付く。
「ごめん！ごめんよアリス！アリスを無視してたとかじゃないんだ！うさぎの奴が俺達二人の時間を邪魔しようとしたから、追い払っていただけなんだよ。」
　猫撫で声で言いながら、ゴロゴロとアリスに擦り寄る。そんなチェシャ猫を、うさぎは恨めしそうな顔で見つめていた。
「もういいわ・・・。」
　アリスがそう言うと、チェシャ猫は嬉しそうに抱き付いた。
「アハハッ！ありがとうアリス！大好きだよ！」
　ゴロゴロと喉を鳴らしながら抱き付くチェシャ猫に、アリスは子供でもあやすかの様に、頭を撫でる。そんな光景に、うさぎは耳を垂らして寂しそうに俯いていた。チェシャ猫はアリスに抱き付いたまま提案をする。
「ねぇアリス！あの医者にでも頼んで、新しいお菓子を用意して貰おうよ。それで改めてお祝いをしようよ！」
「そうね・・・床に落ちたクッキー何て、流石に食べれないものね・・・。うさぎ、ドジソン先生の所へ行って、貰って来てくれる？」
　うさぎは嬉しそうにコクリと頷くと、病室を出てドジソンの診察室へと向かった。病室を出るうさぎを見て、チェシャ猫はニンマリと笑う。

「ねぇアリス・・・これで邪魔者は居ないし・・・二人でたっぷり遊ぼうよ。」
「遊ぶって、何をして？何か面白い遊びでもあるの？」
少し素っ気なく言うアリスに対し、チェシャ猫は更にニンマリと笑い、今度は力一杯にアリスへと抱き付いた。
「こうしてるだけで、楽しいじゃあん？」
「ちょっと！痛っ・・・痛いわよ！」
思い切り力強く抱き付くチェシャ猫に、アリスの顔は苦痛に歪む。
「チェシャ！痛いって言っているでしょ？そんなに強くする事ないでしょ！」
そんなアリスとは裏腹に、チェシャ猫は更に強くアリスを抱きしめる。
「だって、思い切りアリスを抱きしめたいんだ。もっともっと、アリスに触れて、アリスの感触を味わいたいんだ。」
苦痛に歪むアリスの顔に、歪んだ笑みを浮かべたチェシャ猫の顔。必死にチェシャ猫を振り払おうとするアリスだったが、その力は余りにも強く、ビクともしない。
「ねぇアリス・・・うさぎ何て要らないよ。必要無いよ。あんな奴捨てて、俺達二人だけで過ごそうよ。」
甘い声でアリスの耳元で囁く様に言うチェシャ猫。そんなチェシャ猫に、アリスはカッとなり、強く叫んだ。
「うさぎは私の初めての友達よ！後から来た貴方が、勝手な事言わないで！偉そうに私に命令しないで！」
アリスの怒鳴り声と共に、病室のドアが勢いよく開く音がした。
「アリス？どうしたの？」
うさぎの姿を見て、一瞬力が抜けたチェシャ猫の腕を、アリスは一気に振り払った。
「何でもないわ。それより、お菓子は貰って来てくれたの？」
不機嫌そうに言うアリスに、これ以上聞けば怒られてしまうかもしれない、と思ったうさぎは、何も言わずにニコリと笑い、両手に

持つチョコレートの入った缶を差し出した。
「まぁ！チョコレートね！美味しそう！早速頂きましょう。」
うさぎの差し出したチョコを見て、アリスは嬉しそうに笑った。
それを見たうさぎはアリスの機嫌が良くなったとホッ肩を落として言った。
「あぁ・・・それでね、アリス。実は、ドジソン先生が診察室まで来て欲しいって言ってたよ。」
うさぎのその言葉に、アリスは又も不機嫌な顔になる。
「嫌よ！今からこのチョコレートを頂くのよ。」
そんなアリスに、うさぎは恐る恐る更に言う。
「あ・・・でも・・・。今すぐ来てほしいって言っていたから・・・。大事な話とか・・・。」
はぁ・・・と少し溜息を吐いてから、アリスはチョコの入った缶をうさぎの手に戻した。
「分かったわ・・・。行けばいいんでしょ、行くわよ。」
その言葉を聞いたうさぎは、又もホッと肩を撫で下ろす。
「私が戻って来るまで、これはまだ食べちゃダメよ！あっ・・・そうね・・・うさぎは一つだけなら食べてもいいわ。お使いに行って来たご褒美。でもチェシャはダメ！いいわね？」
うさぎは嬉しそうに何度もコクコク、と頷くが、チェシャ猫はとても不満そうな顔だ・。
「アリス！何でうさぎはいいのに俺はダメなの？」
「私の言う事を聞かなかった罰よ！いい、私が戻るまで絶対に食べちゃダメだから！うさぎ！見張っていてよ！」
そう強く言い放つと、バンッと勢いよくドアを閉めて病室を出て行った。
アリスが病室を後にすると同時に、うさぎは嬉しそうに缶の中のチョコを一つ摘み、それを口の中に放り込もうとする。が、その瞬間に、バシッとうさぎの持つチョコを、チェシャ猫が手で引っ叩いた。その勢いで、一粒のチョコは床へと転げ落ちる。

「何をするんだ！」
チェシャ猫に怒りながらも、転げ落ちたチョコを拾い、フーフーと息を吹きかけホコリを取り除く。そんなうさぎの姿を見て、チェシャ猫はケタケタと笑っていた。
「自分だけ食べれないからって、嫌な奴だな。」
ムッとしながら言ううさぎに対し、チェシャ猫は皮肉に笑いながら言う。
「後でアリスと二人で沢山食べるからいいさ。どうせお前は、その一粒しか食べれないんだろ？食べさせて貰えないんだろ？ハハハッ。」
「そっ・・・そんな事ないよ！それより・・・アリスが罰だからって言っていたけど・・・。アリスに何かしたの？」
うさぎの言葉に、チェシャ猫は冷たい表情に変わる。
「別に・・・。ただアリスと楽しく遊んでいただけだよ。それをお前が邪魔したんだよ。」
冷徹に放たれる言葉に、うさぎは少し怯えながら聞いた。
「で・・・でも・・・。アリス、怒ってたじゃん。何か怒らせる様な事したんじゃないの？」
「違うよ。遊んでたんだよ。」
チェシャ猫の顔は、更に冷たく、鋭くなる。
「そうだ・・・。せっかく遊んでいたのに、お前に邪魔されたんだ・・・。ムカつくなぁ～。お前、ムカつくよ。」
そう言うと、チェシャ猫はうさぎの腕を思い切り引っ張り、ベッドの上へと投げ飛ばした。
「あっ！な・・・何をするんだよ！」
「お前さ、そう言えば・・・男の癖に何で女の服着てるの？変なの。」
「こっ、これは・・・アリスがこっちの方が似合うからって・・・喜ぶから・・・。」
少し恥ずかしそうに言ううさぎを見て、チェシャ猫は、今度は

大笑いをしながら言った。
「ハッ！あはははははっ！そうだよなぁ～！お前女みたいな顔してるから、女の服の方が似合うよなぁ～！あはははははっ！」
笑い続けるチェシャ猫に、うさぎの顔は更に恥ずかしそうに真っ赤になる。
「ははははっ！あぁ・・・そうだ！お前、本当は女だったりするのか？」
「そんな事・・・。ちゃんと、男の子だよ。」
「本当か？よしっ！なら俺が確かめてやるよ！アハハッ！」
ニタリと笑うと、チェシャ猫はベッドに横たわっているうさぎの両腕を掴み、身動きが取れない様押さえ付けた。
「なっ！何するんだ！離せ！離せよ！」
必死にモガクうさぎだったが、その力は余りにも強くビクともしない。チェシャ猫は容赦無くうさぎの着ていた洋服を脱がし始めた。
「なっ・・・！止めろ！止めてよ！」
半泣き状態で必死に訴えるうさぎだったが、チェシャ猫は聞く耳持たず、と言った感じで洋服を脱がし続ける。
「止めて！お願いだから・・・やめてよ・・・。」
とうとう泣き出してしまったうさぎ。しかしその頃には、無残に洋服を全て脱がされた後であった。そんなうさぎの姿を見て、チェシャ猫はつまらなさそうに言った。
「なぁ～んだ。本当に男かよ・・・。これで実は女でしたってのだったら、面白かったのにさ。」
うさぎに興味を無くしたチェシャ猫は、ひっくり返っていたテーブルと椅子を元に戻すと、チョコンと椅子に座り、足をブラブラとさせる。
「あぁ・・・早くアリスが戻って来ないかな？早く二人でまた遊びたいな。」
ゴロゴロと喉を鳴らしながら、上機嫌でアリスの帰りを待つのだった。

不調和音

「やぁ、アリス君。来てくれたのだね。」
ニコニコと上機嫌で椅子に座り、診断書の整理をしていたドジソン。自身の診察室に来たアリスを見ると、手元にあった診断書をしまい、クルリと椅子をアリスの方向へと向けた。
「それで先生？わざわざ私を呼びつけて、何の用かしら？」
相変わらず素っ気なく言うアリスだったが、上機嫌でいる今のドジソンにはそれが全く気にならない。
「いやいや・・・すまなかったね、わざわざ来て貰ってしまって・・・。いやね、今回はどうしても君の病室まで運ぶ事が出来ないものだから、こうして直接君に来て貰ったのだよ。」
嬉しそうに言うドジソンに、アリスは不思議そうに首を傾げた。
「やたらとご機嫌みたいね・・・先生・・・。」
「あっはっは、そうかい？そんな事無いよ。それより、新しく来た友達はどうだい？うさぎ君とも、上手くやっているかな？」
そんな事ありまくりだ、と思うアリスだったが、それよりもドジソンのその後の言葉に反応をした。
「上手くやっているかですって？冗談！あの二人、喧嘩ばかりして・・・困りものよ！」
不満を漏らすアリスに、ドジソンは困る所が、更に機嫌良くなった。
「そうか、喧嘩ばかりか。うん、いいね。とてもいいよ。」
そんなドジソンの言葉に頭に来たアリスは、怒鳴りつけるかの様に怒った。
「何がいいって言うの？ちっとも良くないわよ！私はイライラしてばかりよ！」
「いやいや・・・それがいい事なんだよ。」
怒るアリスとは裏腹に、ドジソンは穏やかに説明をし出す。

「君は今、イライラしてばかりと言ったね？それは君に、一つの感情が産まれた・・・いや、大きく芽生えたからだ。イライラ、つまりは怒りだ。今まで何の興味も反応も無かった君が、ここまで感情的になって怒っている。それはとても人間らしく、素晴らしい事なのだよ。」

ドジソンの言葉に、ふとアリスは考えた。

「怒り・・・そう言えば・・・こんなにイライラしたのも、怒ったのも、とても久しぶりだわ・・・。」

「うさぎ君が来た時は、どうだったかな？」

「うさぎが来た時・・・？」

アリスは少し考え込んだ。

「うさぎ・・・確かにイライラする時もあったけれど、あの子はすぐに言う事を聞いたから、ここまで感情的に怒った事は無かったわ。あぁ・・・でも一度・・・。」

ドジソンは言い掛けて止めるアリスを促す。

「一度、何かな？」

「一度・・・先生がチェシャを連れて来た時。あの後私、とても酷くうさぎに怒ったの。」

「ほぅ・・・それは何故かな？」

アリスの話をじっくりと聞きながら、ドジソンは何気に診断書にアリスの言葉を書き取る。

「何故って・・・腹が立ったからよ。」

「腹が立った、その理由は？」

「理由は、あの子が先生ととても仲良く話していたからよ！」

また少し強い口調になるアリスの様子も、ドジソンは診断書に記入をする。

「仲良く・・・か。どうして君は、うさぎ君が私と仲良く話をしているのに、腹が立ったのかな？」

「だって！私以外の人とあんなにも仲良く話していたのよ！腹が立つわ！」

思い出してまたも怒りが湧き上がって来るアリスに、ドジソンはニコリと笑い言う。
「そうか、君以外の人と話すと、腹が立つのだね。君はその事が相当気に入らない様だけど、そう言った感情が何なのかを、君は知っているかな？」
ドジソンの質問に、アリスは首を傾げた。
「そう言った・・・感情？」
「そう、うさぎ君が君以外の人と話をするだけで腹が立つ、気に入らないと感じてしまう感情。」
「感情・・・何かしら・・・。怒り・・・とはまた少し違う気がするの・・・。」
困惑気味のアリスに、ドジソンは嬉しそうにその答えを口にした。
「その感情はね、嫉妬、と言うのだよ。」
「嫉妬・・・？私がうさぎに嫉妬しているとでも言うの？」
更に首を傾げるアリスに、ドジソンは嬉しそうに笑った。
「はっはっっはっはっ。そうだったら嬉しいのだけれどもね。でもこの場合は逆だよ。君が私に嫉妬をしたのだよ。」
そんなドジソンの言葉に、アリスは顔を真っ赤にした。
「なっ！私が先生に嫉妬ですって？そんな事あるわけないわ！どうして私が先生に嫉妬しなくちゃいけないの？」
少々恥ずかしそうに言うアリスに、ドジソンはまた穏やかに説明をする。
「君はうさぎ君が私と仲良く話をしていたから、腹が立ったのだろう？それはきっと、私にうさぎ君を取られてしまうのでは？と思ったからではないかな？」
「それは・・・。」
「それとも、彼が君以外の人に興味を示したと思ってしまったから？君以外の人と、君以上に仲良くなってしまうのでは？と思ってしまったからかな？」
「それは・・・多分全部当てはまると・・・思うわ・・・。」

言葉を濁しながら言うアリス。そんなアリスを、微笑ましく見つめながら更に言う。
「そうか、ならその感情は間違いなく、私に向けられた嫉妬だよ。そして大好きな友達を奪われてしまうかもしれないと言う、恐れ。君は既に怒り以外にも、嫉妬と恐れ、と言った感情の芽生えがあったのだよ。」
「大好きって・・・別に大好きって訳じゃ・・・。」
恥ずかしそうにそっぽを向いて俯くアリスに、ドジソンは優しくアリスの手を握った。
「アリス君。君は確実に、様々な感情を取り戻しつつあるのだよ。現に最近、君の病室から笑はい声が聞こえる。これはとても素晴らしい事だ。とても人間味溢れる事なのだよ。」
ドジソンのそんな言葉に、アリスは更に恥ずかしそうに顔を赤らめ、握られた手を振りほどいた。
「何よそれ・・・。感情ならちゃんと前からあるわ。」
「そうだね、誰でもちゃんと前から持ち合わせている。でも君は、長い事それを閉じ込めてしまっていたのだよ？それがまたこうして、再び外へと出ようとしている。外へ感情を出すと言う事はね、とても大切な事なのだよ。笑ったり、怒ったり、泣いたりと、それを外に出す事で、人は自分を表現している。生きていると実感する事が出来、楽しいと感じる事が出来るのだよ。」
「何それ・・・説教臭い・・・。」
「いいかいアリス君。感情を閉じ込め続けてしまうと、人は体も心も痩せ細ってしまうのだよ。何をしていても、楽しいとは感じなくなってしまう。だから、恥ずかしがる事なく、素直に自分の感情を表に出していいのだよ。」
ドジソンの言う言葉に戸惑いながらも、何故か心が安らいでいくかの様に感じ、アリスの顔は和らいでいった。
「じゃあ・・・私はこれからもどうどうと先生に・・・その・・・嫉妬して、チェシャに怒ってもいいって事？」

ドジソンは嬉しそうに頷くと、診断書を閉じ、椅子から立ち上がった。
「そうしてくれた方が、私も彼等も嬉しいと思うよ。さて・・・と。話も済んだ事だし、本題に入ろう。」
「本題？今のが本題じゃなかったの？」
「ははははっ。まぁそうでもあるけれど。君にわざわざ来て貰った理由だよ。」
そう言えばと、アリスはドジソンに呼び出された不満を思い出したかの様に不機嫌に言った。
「そうよ！話なら病室でも出来るのに、何でわざわざこんな所まで呼び出したのよ？」
「ははは。だから今その理由を見せるから、こちらへおいで。」
ドジソンは笑いながら、診断室の奥にある扉の中へとアリスを手招いた。
「こちらって・・・そのドアの向こうに理由があるの？」
アリスはドジソンに招かれるがまま、そっと覗き込む様に扉の中へと入っていった。扉の中は消毒液臭く、小奇麗ではあるがどこかゴチャゴチャとしている。そして部屋の真ん中には大きな手術台が置いてあり、その隣には沢山の医療器具が置いてあった。
「何よここ？手術室？」
不思議そうに辺りを見渡すアリス。そんな中、ドジソンが部屋の奥から手招きをする。
「こっち、こちらだよ。」
ゆっくりとドジソンの元へ行くと、その足元には大きな箱が二つ置いてあった。
「これだよ！君の新しい友達の体なのだけれどもね、２体あって・・・。流石にこの二つを一人で病室まで運ぶのは難儀だったから、直接君に来て貰った方が早いと思ったのだよ。」
「それで、わざわざ呼びつけたのね。」
参った参ったと言う感じに、頭を掻きむしるドジソンに、アリス

は一つ溜息を吐く。
「で？今度はどんな耳の付いた子なのかしら？」
皮肉交じりに言うアリスに、ドジソンはハハハと笑いながら二つの箱の蓋を開けた。箱の中には顔のそっくりな男の子が、それぞれ入っていた。可愛らしいお揃いのベレー帽を二人共被り、洋服までもお揃いだ。
「あら？今度は、耳は無いのね、シッポも・・・・。」
箱の中の二人を交互にマジマジと覗きこむアリス。二人を何度も交互に見ると、首を傾げた。
「どうして同じ物が二つもあるの？」
「ははは っ。彼等は君の言っていたトゥイードルダムとトゥイードルディだよ。まぁ・・・長い名前だから、ダムとディでいいかな？」
「あぁ・・・それで同じ顔の人形が二体あるのね・・・・。」
アリスは納得した様に、何度も小さく頷く。
「でも、これじゃあどっちがどっちか見分けが付かないわ・・・・。」
「心配しなくてもいいよ。ほら、ベレー帽を左に被っている方がダム。右に被っている方がディだよ。」
ドジソンは指を指しながら、どちらがどちらかを説明する。しかしアリスは首を傾げたままだ。
「帽子の向きで判断って・・・・。それじゃあ帽子の向きを変えてしまったら、分からなくなるわ。」
「大丈夫！ちゃんと体に、どちらかが分かる様印を付けておいたからね。」
得意げに言うドジソンだったが、アリスは呆れ顔だ。
「じゃあ、後はアリス君に任せるよ。私は隣の診察室に居るから、何かあったらすぐに呼んでくれたまえ。」
そう言い残し、ドジソンは隣の診察室へと戻って行った。
診察室へと戻ったドジソンは、早速椅子に座ると閉じたアリスの診断書をまた開く。そして簡単に書かれていた先程の会話のやり取

りを、事細かく書き直した。言葉一つ一つ、仕草や動作、反応と言った事まで、全てを書き記す。
「うん。思っていた以上の成果が出ている。もう一人増えた事で、彼女は自分の役割を見出しただろうな。二人が喧嘩をする。その仲裁に入らなければいけないと言う思念と役割。これはコミュニティーにおける基本的役割だ。これであのダムとディが加わるとどうなるか・・・。これからが本番と言った所かな・・・。」
ドジソンは何度も診断書を読み返しながら、ウンウンと頷く。
「成程・・・医院長はただ単に彼等を治療の掛け橋にしているだけでは無く、治療そのものにしていたのか・・・。現実を見ない・・・それは他者を見ないと言う事でもある。しかし彼等との接触は、例え元は彼女の中に居た意識とは言え、他者との接触と同じ事になる。対人関係の言わば練習と言う様な物か・・・。小さな病室と言う社会。その中で様々な感情や役割を見出し、社会適合をさせる・・・と言った所かな？これで外への関心が高まればいいのだが・・・。」
一人ブツブツと言いながら真剣に診断書を読み続けていた。そしてこれからの方針を考えながらも、医院長への報告書を書き出し、それをファイルに納めていた最中だった。突然隣の部屋から、ドタッドタッと物凄く大きな暴れる音が聞こえて来た。
「何だ？何の音だ？」
突然の騒音に驚いたドジソンは、慌てて隣の部屋へと行こうと、扉に手を掛ける。扉を開けようとした瞬間に、思い切り向こう側から扉が開くと、血相を変えたアリスが飛び出して来た。
「先生！先生！何とかして！」
取り乱しながら出て来たアリスは、そのままドジソンを部屋の中へと引っ張り込む。
「先生！あの二人を止めて！何とかして！」
部屋の中に入ると、目を覚ましたダムとディが、取っ組み合いの喧嘩をしているではないか。部屋中を駆けずり回りながら殴り合い、部屋にあった道具や物はあちこちへと散らかされている。

「なっ・・・これは・・・いったい何があったのだね？」
その様子に驚いたドジソンは、慌てて二人の間に割って入った。
「止めなさい！どうしてこんなに喧嘩をしているのだ！」
二人の喧嘩を止めに入ったドジソンだったが、そんな事はお構い無しにダムとディの喧嘩は続く。
「僕が先に言うんだ！」
「いやっ！僕が先に言うんだ！」
二人はドジソンを押し退けると、またも取っ組み合いをし始める。
「お前は寝てろよ！」
「お前が寝てろよ！」
二人に押し退けられたドジソンは、ドタッと、そのまま尻もちを付いてしまった。
「イタタタ・・・。」
お尻を摩りながらゆっくりと立ち上がると、再び二人の間へと入り込み、今度は強い口調で言った。
「止めないか！何故こんな喧嘩をしている？」
怒鳴りつける様なドジソンの声に、二人は一瞬動きを止めて言う。
「僕が先にアリスに挨拶をするんだ！」
「いやっ！僕が先にアリスに挨拶をするんだ！」
そんな二人の言葉に、ドジソンは呆れた様子で言った。
「君達は・・・どちらが先にアリス君に挨拶をするかで、喧嘩をしているのか？」
「「そうだ！」」
二人同時に答える。そしてまたも喧嘩が始まる。そんな二人の様子に、完全に呆れてしまったドジソンは、溜息を吐きながらアリスの元へと向かった。
「アリス君・・・君から言ってやってはくれないか？どちらからでもいいと・・・。」
すっかり気が抜けてしまったドジソンに対し、アリスの体は小さく震えていた。

「アリス君？どうした、大丈夫かい？」
アリスの様子がおかしい事に気付いたドジソンは、そっとアリスの肩に手を置いた。
「どうした？震えているよ？・・・アリス君？」
心配そうに見つめるドジソンに、アリスは声を震わせながら言う。
「先生・・・私・・・怖い・・・。怖いわ・・・。」
「怖い？怖いとは・・・あの二人がかい？」
「違う・・・違うの・・・。あんなに言い争って・・・喧嘩をして・・・。伯父様や・・・伯母様達みたい・・・。」
今にも泣きそうなアリスのその言葉に、ドジソンはハッとした。
（これは・・・遺産争いの時の光景を思い出してしまっているのか・・・。あの時のトラウマが、今のダムとディの激しい喧嘩で重なって・・・。これは危険だ・・・。）
ドジソンは新たに二人の間に割って入ると、今度は力ずくで二人の体を引き離し、大声で怒鳴った。
「止めなさいと言っているのだ！」
激しい怒鳴り声に二人は驚き、一瞬時間が止まったかの様な空間が生まれる。そしてダムとディの体の力が抜けると、ドジソンは二人をアリスの目の前へと連れ出した。
「見なさい！君達の喧嘩のせいで、アリス君はこんなに怯えてしまっている！」
アリスの体は小さく震え、頬には一つ、二つと涙が零れ出していた。そんなアリスの姿を見たダムとディは、険しかった顔から悲し気な顔へと変わる。
「あ・・・アリス・・・。」
「アリス・・・。」
アリスは声を殺すかの様に、ヒクヒクと泣きじゃくる。
「見なさい、泣いてしまっているではないか！きちんと彼女に謝るのだ。怖がらせてしまった事をね。」
ダムとディは互いに顔を見合わせた。

「ごめんよ、アリス。」
「ごめんよ、アリス。」
謝る二人だったが、それでもアリスは泣き止む事が無い。
「怖がらせてごめんよ。」
「もう僕達喧嘩はしないから。」
必死に謝る二人に、アリスは涙を拭いながら言う。
「ほ・・・本当に？・・・もう・・・殴り合ったり・・・しない・・・？」
二人は飛びきりの笑顔で、何度も頷いてみせた。その笑顔を見て、ようやくアリスの顔にも笑顔が戻り、ニコリと笑った。
「よかった・・・。」
嬉しそうに笑うアリスを見て、ドジソンはホッし、アリスの頭を優しく撫でた。
「よかったね、アリス君。それでは、改めて3人で仲直りをしなさい。私は席を外すから・・・。」
そう言い残すと、ドジソンは部屋を後にし、隣の診察室へと戻って行った。

ドジソンを後に、ダムとディは改めてアリスに挨拶をする。
「初めましてアリス。僕はトゥイードルダム。」
「初めましてアリス。僕はトゥイードルディ。」
二人はベレー帽を取り、行儀よく同時に頭を下げた。
「知っているわ。ダムとディね。」
穏やかに頬笑みながら言うアリスに、二人は嬉しそうに続ける。
「先程は失礼しました。」
「見苦しい姿を見せてしまったね。」
二人の言葉に、アリスはニコやかに首を振った。
「アリスが優しい子でよかった。」
「でも僕等はアリスにお詫びをしなくちゃいけない。」
「お詫・・・び？」

不思議そうに首を傾げるアリス。ダムとディは互いに向き合い手を繋ぐと、ゆっくりと互いの体を近づけた。
「「楽しいショーをお見せしよう。」」
二人同時に言うと、互いの体を密着させ、顔を少しづつ近づけ、そのまま二人は唇と唇を重ねた。軽く触れ合う唇は、次第に強くお互いの唇を貪るかの様に、激しくキスをする。アリスは顔を真っ赤にしながら、それを茫然と見つめていた。やがて二人の激しいキスが終わると、二人は嬉しそうに言う。
「どうだい？アリス。」
「同じ顔同士の口付け。」
「「とても不思議で楽しいでしょ？」」
二人はケタケタと笑いながら、何度も何度もキスをした。
「もっ・・・もういいわ！分かったから、もうしなくていいわ！」
顔を真っ赤にさせたアリスは、戸惑いながらも二人に言った。
「「アリスがそう言うなら、もう止めるよ。」」
又も二人同時に言うと、密着させていた体を離し、アリスの方へと向く。
「ねぇアリス。それよりここはもういいよ。」
「アリスの部屋で遊ぼうよ。」
ニコニコと無邪気に言う二人は、まるで善悪の区別もまだ付かない子供の様であった。アリスは無言で頷くと、隣のドジソンの居る診察室へと移動をした。
「ドジソン先生、私達、もう病室へ戻るわ。」
机の上でセッセと仕事をしていたドジソンに声を掛けた。アリスの言葉に、ドジソンは無事収まったのだと安心をした顔をし、ニコリと笑う。
「あぁ・・・そうかい。そうだね、うさぎ君と猫君を待たせたままだしね。分かったよ、そうしなさい。」
ダムとディは軽くドジソンに会釈をしてから、アリスはそのまま、診察室から出て行った。そんな3人を見送った後、ドジソンは深く

溜息を吐く。
「ふぅ・・・。いつも通りのアリス君に戻っていたな・・・。しかし驚いた・・・。彼女があんなにも取り乱している所など、初めて見たからな・・・。」

狂気の国

ダムとディを後ろに連れ、アリスは自身の病室へと向かっていた。後ろからは二人のクスクスと笑う声が聞こえて来る。何かをしているのだろうが、それをあまり見たくなかったアリスは、後ろを一度も振り向かず、前だけを見て進んだ。

不気味にも思える二人の笑い声は、時折すれ違う看護婦の顔を見れば、自ずと想像が付いた。あの診察室の隣の部屋でしていた事と、似たような事でもしているのだろう。アリスは病室の前に着くと、ようやく後ろを振り返り、強く二人に言った。

「いい！この中に入ったら、必ず私の言う事を聞くのよ！言う事が聞けない様な悪い子は、追い出すから！」

二人仲良く手を繋いでいたダムとディは、ニコリと笑い同時に言う。

「「分かっているよ。」」

まるでつい先ほどまで、殴り合いの喧嘩をしていたとは嘘の様に、二人はとても仲良しで居た。少し不安な気持ちもあったが、アリスは二人のその言葉を聞くと、ゆっくりと病室のドアを開けた。

ガチャッと言うドアの開く音と共に、突然病室からチェシャ猫が飛び出し、うむも言わずにアリスに抱きついてきた。

「アリス！やっと戻って来てくれたんだね！寂しかったよアリスー！」

突然のチェシャ猫の突撃に驚いたアリスは、必死に体に絡みつく様に抱き付くチェシャ猫を振り払う。

「ちょっと！いきなり何よ！離しなさい！」

チェシャ猫を体から引き離すと、アリスは病室の中を見て更に驚いた。ひっくり返っていた椅子やテーブルは元に戻され、その上には綺麗にお茶の用意がされている。そして紅茶塗れになっていた床も、綺麗に掃除がされており、何よりそれ以外にも床に散乱してあ

った洋服やぬいぐるみまで、綺麗に片づけられているではないか。だがアリスが一番驚いたのは、部屋が綺麗になっていた事では無かった。ベッドの上に泣きながら座っているうさぎの姿だ。
うさぎは真っ裸に、白いシーツ一枚でそれを必死に隠す様にくるまっていた。鎖はベッドの端へと巻き付けられ、うさぎの着ていた洋服は鎖を伸ばしてもとても届かない場所に抜き捨てられている。どうする事も出来ずに、うさぎはただ泣いていたのだった。
そんなうさぎの姿を目にしたアリスは、湧きあがる怒りをそのままチェシャ猫にぶつけた。
「チェシャ！これはいったいどう言う事なの？うさぎに何をしたの！」
怒るアリスとは裏腹に、チェシャ猫はケラケラと笑いながら言った。
「うさぎの奴が、本当に男かどうか確かめてただけだよ。まぁ本当に男だったから、アリスにも見せてあげようと思ってさ。それより見てよ！部屋、綺麗になっただろ？俺が片づけたんだ！凄いでしょ？」
嬉しそうにクルクルと部屋の中を回るチェシャ猫。そんなチェシャ猫のシッポをアリスは思い切り掴んだ。
「痛っ！痛いよアリス！シッポ！シッポ！」
痛がるチェシャ猫を無視し、アリスはうさぎの洋服を床から拾い上げると、そのままうさぎの所へと投げ込んだ。
「貴方も！何時までもメソメソ泣いていないで、早く服を着なさい！」
洋服を手にしたうさぎは、そのままシーツの中に潜り込み、コソコソと服を着始める。
「チェシャ！あれは私の物なの！勝手な事しないで！勝手に私の物に触らないで！」
思い切りシッポを握りながら言うアリスに、チェシャ猫は涙目になりながら何度も謝った。

「分かった！分かったよアリス！ごめんっ！ごめんよ！謝るから・・・もうシッポを離してよ！」
「誓いなさい！もう二度と勝手な事はしないと！」
「分かった・・・誓うっ、誓うよ！」
チェシャ猫のその言葉で、ようやくアリスはシッポから手を離すと、チェシャ猫は床に座り込み何度もシッポを手でさすった。アリスはベッドの端に括り付けられていた鎖を外すと、すすり泣くうさぎの隣に座り、優しくうさぎの頭を撫でた。
「可哀想に・・・でも貴方は男の子なのよ？そんなにメソメソ泣いてはダメ！」
アリスの言葉に、うさぎは涙を拭きながら何度も頷く。そんな様子を見ていたダムとディは、クスクスと笑っていた。
「クスクス・・・泣き虫うさぎに。」
「クスクス・・・馬鹿猫だ。」
そんな二人をチェシャ猫は鋭い目付きで睨みつける。
「黙れよ・・・変態兄弟め！」
言い様の無い歪な空気が漂う中、アリスはパンパンッ、と手を叩くと、立ち上がって言う。
「さぁ、皆喧嘩はもう駄目よ！新しく二人もまたお友達が増えたんだから、お祝いしましょう。」
そう言うと、新たにティーカップを二つ取り出し、テーブルの上に置いた。紅茶をカップの中に注ぐと、うさぎが大事そうに抱えていたチョコレートの缶を広げ椅子に座る。
「さぁ、皆もいらっしゃい！お茶の時間よ！」
４人はゆっくりと椅子に座ろうとするが、生憎椅子は３つしか無かった。
「うさぎ、お前は床だったな。」
ケタケタと厭味ったらしく言うチェシャ猫を、アリスはキッと睨みつける。
「じょっ・・・冗談だよ。本気にしないでよ、アリス！」

焦りながら言い訳混じりに言うチェシャ猫に対し、ダムとディはニコやかに言った。
「問題無いよアリス。」
「僕等は椅子1つで十分。」
するとダムが椅子に座ると、そのダムの上にディが座り出した。
「ちょっと、膝の上に座るの？」
「「そうだよ。」」
さも当たり前かの様にしている二人に、アリスは呆れた顔で軽く溜息を吐く。
「まぁいいわ・・・。さぁ、うさぎも座りなさい。」
アリスに手招きされると、うさぎは嬉しそうにチョコン、とアリスの隣へと座った。
「うさぎ、私の言い付け通りに、チェシャにはチョコ食べさせてない？」
「うん！大丈夫だよ。ちゃんとアリスに言われた通り、見張っていたから。」
「そう、貴方は本当にいい子ね。」
ニコやかに言うアリスに、うさぎはとても嬉しそうだ。そんな二人のやり取りを、不満そうに見ていたチェシャ猫が言った。
「アリス！それより、俺が部屋を片付けたんだよ。アリスが戻って来て、すぐにお茶が出来る様に。」
「あぁ・・・そう言えばそうだったわね・・・。ありがとうチェシャ。」
ニコリと笑うアリスに、チェシャ猫は上機嫌になりアリスのカップに紅茶を注いだ。しばらくはそんな穏やかなお茶会が続いていたのだったが、先程まで仲良くチョコを食べていたダムとディが、又も突然喧嘩をし始めた。
「これは僕のチョコだ！」
「いやっ！僕のチョコだ！」
一つのチョコを争って、一つの椅子に二人座りながらの言い争い

が始まる。
「僕が先に取ったんだ！」
「僕の方が早かった！」
そんなダムとディの様子を、チェシャ猫はケラケラと笑いながら見つめ、うさぎはオロオロとしている。
「僕が食べるんだ！」
「僕が食べるんだ！」
取っ組み合い、とまでは行かないものの、互いに口の中に入れようとする一つのチョコを、互いに邪魔をし合うと言った感じだ。
「うっ・・・あの・・・えっと・・・。」
何とか二人の喧嘩を止めようとするうさぎだったが、何と言えばいいのか分からず、言葉が出てこない様だ。そんなダムとディに、アリスは、今度は冷静にポツリと言った。
「半分個にすればいいんじゃないの？」
アリスのその一言に、ピタリと二人の喧嘩が止まる。
「「それもそうだ。」」
二人顔を見合わせて言うと、ニンマリと笑った。その様子を見ていたチェシャ猫も又、ニヤリと笑う。
「さぁ・・・変態ショーの始まりだぞ。クククッ。」
不敵な笑いを浮かべるチェシャ猫に、うさぎは慌ててアリスの両目を手で覆った。
「ちょっ・・・何よ？うさぎ・・・。」
「ダメ！アリスは見ちゃダメ！」
顔を真っ赤にしながら言ううさぎに、チェシャ猫は更に不敵な笑い声を上げた。
「見ちゃダメなのはお前だろ？弱虫うさぎ！アリスにも見せてあげなよ。」
チェシャ猫の言葉に、アリスは無理やりうさぎの手を顔から引き離すと、チェシャ猫に言った。
「どうせキスをするんでしょ？それならもう見たわよ。」

「ククク・・・それだけじゃないよアリス！見れば分かるよ。」
ケタケタといながら言うチェシャ猫に対し、うさぎは必死にアリスが見えない様、何度もアリスの目を隠そうとする。
「もうっ！邪魔しないでようさぎ！」
いい加減イラッと来たアリスは、うさぎの鎖を強く引っ張った。
「ううっ！」
そのまま床に倒れ込むうさぎだったが、アリスは気にもせず、ダムとディをじっと見つめる。
「じゃあ半分個だね。」
「うん、半分個だね。」
ダムがチョコを半分口に銜えると、ディがもう半分のチョコを口に銜えた。そしてそのまま互いに舌でチョコを撫で回し、唇が触れ合いながらも舐めて行く。お互いの舌を口の中に入れながら、何度も何度もチョコを口の中で転がしながら撫で回していると、溶けて行くチョコとは別の物が二人の口の中から零れ始めた。
「何？・・・チョコ・・・じゃないわよね・・・似たような色だけど・・・。」
不思議そうに見つめるアリス。ダムとディの口の中から、ドス黒い赤い雫が滴り落ちる。それと共に、ガリガリと小さな音も聞こえて来た。
「あれ・・・もしかして・・・血・・・？」
眉を顰めながら言うアリスに、チェシャ猫はケタケタと笑いながら言った。
「そうだよ、アリス。あいつ等の仲直りは激しいんだ。ハハハッ！」
ダムとディはお互いの舌をかじりながらチョコを舐め回していた。二人の口から滴る血に、アリスは思わず思い切り二人の顔を引き離す。
「もういいわ！止めなさい！」
顔が離れた二人の口の周りは、血で真っ赤に染まっている。まるで生肉を食べたゾンビの様に。

「何でこんな事するの？」
歪に歪んだアリスの顔を見て、うさぎは思わずアリスに抱き付いた。
「アリス！だから見ちゃダメだって言ったんだ。この二人・・・オカシイんだよ！」
そんなうさぎの言葉に、ダムとディはケラケラと笑いながら言った。
「オカシイのはお前だろ？」
「アリスに苛められて喜ぶドＭうさぎ。」
口の周の血を拭き取ると、二人はニコやかにアリスに言う。
「「半分個だよ。甘さも、痛みも。」」
そんな二人にゾッとしたアリスは、抱きついているうさぎの腕を強く握りながら言った。
「そんな半分個・・・ダメよ。これから仲直りは握手にしなさい！」
少し声を震わせながらも言うアリスの言葉に、二人は素直に頷いた。
「分かったよ。」
「アリスがそう言うなら。」
ニコリと笑い、何も無かったかの様に紅茶を飲み出すダムとディ。そんな二人を見ながら、アリスとうさぎもゆっくりと椅子に座った。相変わらず不敵な笑みを浮かべるチェシャ猫は、チョコを手に取り口に咥えると、アリスにそれを差し出した。
「アリス～。俺達もやろうか？」
「やらないわよ！」
強く否定をするアリスに、チェシャ猫はケラケラと笑う。
「チェシャ！あんまり悪ふざけが過ぎるなら、出て行ってもらうわよ！」
「冗談だよ。それに俺は、アリスを傷付けたりしないからね。」
ニコリと笑い、チェシャ猫はアリスの手の甲に軽く口付けをした。

その日の夜、ダムとディはお互いに寄り添いながら、床に敷いたシーツの上で眠っていた。うさぎも又、その隣でスヤスヤと眠っている。アリスはベッドの上に横たわるが、今日の出来事やら、ドジソンに言われた言葉やらが頭の中をグルグルと回り、中々名眠れずにいた。

（お友達・・・私のお友達・・・。私だけを求めてくれる・・・友達・・・。確かにそうだけど、何か変よ・・・。どこかオカシイわ・・・。本当に・・・これが私の望んだ事なの？）

様々な疑問が頭の中に浮かび、悶々と考えている最中、突然自分のベッドの中に、誰かが入り込んで来たのに気付いた。

「誰っ？」

羽織っていたシーツを覗き込むと、隙間からチョコンと猫の耳が見える。

「チェシャ？」

アリスの足元からモソモソと上へと上がって来たチェシャ猫は、アリスの顔のすぐ横へと顔を出した。

「チェシャ！何よ？勝手に人のベッドに潜り込んで！」

少し怒鳴る様な口調で言うアリスに、チェシャ猫は口元に人差し指を当てて言う。

「シー。静かに、アリス。皆が起きてしまう。」

小声で言うチェシャ猫に、アリスも小声で言った。

「何なの？人のベッドに潜り込んで・・・。」

「皆が寝ている間に、アリスに話したい事があったんだ。誰にも聞かれたくなかったからさ。」

「話したい事？」

不思議そうにするアリスに、チェシャ猫はニコリと笑って続けた。

「俺思ったんだ。アリスの友達は、俺だけで十分じゃないかってさ。だってほら、今日見た通り、ダムとディはイカれた只の変態兄弟だ。うさぎ何か、ただのアリスのおもちゃだろ？でも俺はアリスの役に立つ。今日だって綺麗に部屋を片付けたし、何より誰よりもアリス

の事を思っている。」
「突然・・・何を言い出すの？私は別に・・・。確かに貴方はいい子でいれば役に立つけれど、うさぎはおもちゃじゃないわ。あの二人も、オカシイけれど、素直に謝るし・・・。」
「違うよアリス。アリスは分かっていないよ。俺がうさぎと喧嘩をしたのは、うさぎが俺の邪魔をしたからだ。ダムとディのイカれた行為を見せたのは、あいつ等の本性をアリスに教える為だよ。」
　チェシャ猫の言葉の意味がよく分からなかったアリスは、悩ましげな顔をして聞いた。
「つまり、貴方は何が言いたいの？」
「つまりね、あいつ等が居なければ、アリスは楽しく過ごせたんだ。アリスがイライラする事も無く、俺と楽しく遊べたんだよ。」
　そしてチェシャ猫はニマリと笑って言った。
「だからさ、あいつ等を消してしまおうよ。それで俺とアリスだけで、ずっと楽しく過ごすんだ。邪魔者を消してしまおうよ。」
　ニンマリと笑いながら言うチェシャ猫の言葉に、アリスはゾッした。それはダムとディのお茶会の時に感じた物とは違い、恐怖に近い物だった。
「なっ！何を言っているの？私は、沢山の友達と遊びたいの！そんな・・・貴方は私をただ独占したいだけじゃないの？」
　そんなアリスの言葉に、チェシャ猫は更に不敵な笑みを浮かべて言う。
「あぁ・・・そうだね・・・。きっとそうだ。俺はアリスを誰にも渡したくないんだよ。誰にも触れさせたくない。誰にも見せたくない。誰にも話し掛けさせたくない。俺だけ・・・俺だけの物にしたいんだ。」
　アリスは思わずベッドから飛び起きた。後退りをするアリスに、チェシャ猫は少しづつ近づきながら言う。
「でもね、アリス。勘違いしないでね。これは俺がアリスの事を想っての事なんだ。それだけアリスの事を想っているって事なんだ。」

壁を背にチェシャ猫から離れようとするアリスの腕をチェシャ猫は掴むと、そのまま自分の元へと引き寄せた。そしてそのまま力強くアリスを抱きしめると、余りの力強さにアリスの顔は苦痛に歪む。
「くっ・・・苦しい・・・。」
苦しむアリスを気にもせず、チェシャ猫は更に言う。
「アリス・・・俺だけのアリス・・・。誰にも渡さないよ。ずっとずっと、俺と過ごすんだ。」
「くっ・・・苦し・・・。は・・・離して・・・。」
苦痛に歪むアリスの顔。強く、強く抱きしめるチェシャ猫。そんな異様な光景が少しの間続いたかと思うと、突然チェシャ猫は大声を上げた。
「うわあああぁぁぁぁ！」
チェシャ猫の叫び声と共に、アリスの体はようやく解放をされ、そのままグッタリとベッドへと倒れ込んでしまう。
「痛い！痛い！」
痛がるチェシャ猫。そのチェシャ猫のシッポを、うさぎは首に付けられていた鎖で思い切り締め付けていた。
「痛い！離せ！離せ馬鹿うさぎー！」
もがくチェシャ猫に対し、容赦無くはギリギリと鎖を絞め付けるうさぎの目は、何時もに増して赤く光っている。
「離さないよ！これ以上アリスに手出しが出来ない様に。」
怒りに満ちたその声は、普段のうさぎからは想像もできない声であった。チェシャ猫はグルグルとその場を回り、うさぎの足がよろけた隙にシッポを鎖から引っこ抜き、うさぎを思い切り突き飛ばす。
「うわっ！」
倒れ込むうさぎの体を思い切り踏みつけると、金色の瞳をギラギラとさせながら言い放った。
「また俺の邪魔をしやがったな！お前、マジで気に入らねぇ！今すぐ壊してやる！」
そう言うと、チェシャ猫は長い袖の中に隠していた鋭い爪を出し、

うさぎ目掛け勢いよく振り落とした。うさぎは思わず目を閉じる。しかし、いつまでたっても痛みが押し寄せて来る事が無い事に気付き、ゆっくりと目を開けた。目を開けて見れば、ダムとディが二人してチェシャ猫の体を押さえ付けている。うさぎはその隙にチェシャ猫の足を跳ね除け、体を素早く起こした。

「ダム・・・ディ・・・ありがとう。」

ホッするうさぎに、二人はニコリと笑いながら言った。

「「仲直りの握手だ。」」

ニコニコとしながら言う二人に、チェシャ猫は怒ったまま言う。

「何が仲直りの握手だ！それはお前等だろ！俺とこいつは違う・・・。」

再びうさぎを睨みつけると、うさぎも負けずとチェシャ猫を睨みつけた。

「仲直りの握手はアリスが決めた事だよ。」

「だからさ、ちゃんとやらなくちゃ。」

「「お互いの指が砕けるまで。」」

不敵な笑みを浮かべて言う二人に、チェシャ猫も不敵な笑みを浮かべた。

「あぁ・・・それもそうだな・・・。この俺の鋭い爪と、握手しようぜ・・・。」

そう言うと、うさぎの目の前に、鋭い爪を差し出した。うさぎは自分の手に鎖をグルグルと巻き付けると、同じ様にチェシャ猫の前に手を差し出す。ダムとディはその様子をクスクスと笑いながら見つめていた。

（何よこれ・・・。何なの・・・。）

モウロウとする意識の中でボンヤリと見える光景に、アリスの頭の中は混乱していた。

（何故・・・？私はただ・・・私だけを見てくれる友達が欲しかっただけなのに・・・。せっかく沢山の友達が出来たのに・・・どうして皆喧嘩ばかりするの・・・？争うの？壊れて行くの？・・・あ

ぁ・・・そうか・・・。私だけを見ているからか・・・。だから・・・・・。）

アリスは痛む体をゆっくりと起こした。そして声を絞り出す様に言う。

「や・・・止めて・・・。もう止めて・・・。」

そんなアリスの声に気付いたダムとディは、笑いながら言った。

「何を止めるの？」

「これはアリスが決めた事だよ？」

不気味な笑みを浮かべながら言う二人に、アリスの目には涙が溢れ出していた。

「お願いだから、もう止めて・・・。もう・・・傷付け合わないで・・・。」

泣きながら言うアリスだったが、それでも二人は笑いながら言う。

「どうして傷付け合ってはいけないの？」

「これはアリスの為にやっている事だよ？」

「「アリスが望んだ事だよ。」」

「違う！私は・・・こんな事望んで無い！」

泣きじゃくりながら言うアリスに、今度はチェシャ猫が言った。

「望んださ。アリスは自分だけを見てくれる友達を望んだじゃないか。だから皆、アリスだけを見ているんだよ。アリスしか見ていないんだよ。だからさ・・・他の奴等がどうなろうと、知った事じゃない。」

チェシャ猫の言葉に、アリスは絶句した。確かに、チェシャ猫の言う通りだと思ったから。アリスしか見ていないと言う事は、周りは見ていない。だからアリスを見る自分の視界に入る邪魔な物は消そうとする。当然、他の者と仲良くする事も、する気すら無い。

「それは・・・まるで私と同じね・・・。現実を・・・周りを見なくなった私と・・・同じ。」

アリスは初めて今までの自分を振り返り気付いた。自分も今まで

周りを、他者を見てこなかった。誰かが泣いていても、誰かが傷ついていても興味を示さず。医者の言う事にも耳を貸さず、邪魔だから消えろと言わんばかりに冷たくあしらって来ていた。兄弟達にも見捨てられ、誰かと仲良くなってもまた見捨てられるのでは？と言う恐怖心から生まれた孤立。そんな中、自分の中で作り出された意識達は、何よりも安心の出来る存在だった。自分の中に居るのだから、決して見捨てられる事は無い。何があろうと、必ず自分の側に居る。そんな者達が外に出れば、永遠に一緒に居てくれる。そう思っていた。しかしそれは、アリスに対してだけ。その意識達が共に手を取り合い過ごす等、初めからアリスの作った彼等のプログラムの中には組み込まれていなかったのだ。

「そう・・・そうよね・・・。皆私だけを見てくれているから・・・。こんな事になるのよね・・・。」

アリスは涙を拭い、ゆっくりと立ち上がった。

「私、分かったの。何故医院長が貴方達に体を与えたのか・・・。ドジソン先生が、感情を外に出せと言っていたのか・・・。」

アリスはゆっくりとうさぎの元へと行くと、ずっと付けられていた首枷を外した。

「あ・・・アリス？」

うさぎは不安そうにアリスを見つめた。アリスは優しくうさぎに笑いかける。

「ごめんなさいね・・・。こんな物を付けてしまって・・・。」

うさぎはプルプルと何度も首を横に振る。

「ドジソン先生が感情を外に出せと言ったのはね、きっと・・・フフッ、私が人間だって事を言いたかったのね。貴方達とは違う、命を持つ人間だって・・・。」

それまで不敵な笑みを浮かべていたダムとディ、そしてチェシャ猫の顔は、不思議にしていた。

「そして医院長が貴方達に体を与えたのは、きっと私を見せる為ね・・・。そう・・・私と言う自身を鏡に映した姿を、直に見せる為。」

微かに笑うアリス。
「先生方には感謝しなくては・・・。お陰で私は気付く事が出来たんだから・・・。貴方達と接し、自分が今まで何をして来たか。そして・・・眠ってしまっていた色んな感情が目を覚ましてくれた・・・。」
「何だよ・・・アリス・・・。怒ってるの？それなら謝るよ。」
ヘラヘラと笑いながら言うチェシャ猫に対し、アリスは優しくチェシャ猫の頭を撫でた。
「違うわ。怒ってないわ。分かったの。貴方達は・・・私の歪んでしまった感情、思いだって・・・。だから・・・貴方達は壊れている・・・。」
「「まだ壊れてないよ？」」
相変わらず同時に言うダムとディに、今度は少しキツめに言った。
「いいえ！壊れているわ！狂った感情しか、ここにはない！」
そう言うとアリスは目を閉じた。そして強く念じながら、言い放つ。
「貴方達はもう要らない！消えてしまいなさい！」
力強い言葉と共に、一斉に体から強い光を放った。光は大きく広がり、部屋中を包みこむ。目も開けられない程の眩しく強い光に、アリスは目を閉じると、そのまま意識を失い倒れ込んでしまった。

愛する友達

チュンチュンと、可愛らしい小鳥の囀りが聞こえる。外は陽気に晴れ渡り、ポカポカと温かい日差しが窓から差し込んで来た。時折鋭く差し込む日差しが、アリスの目を何度か照らす。その光に誘われるかの様に、アリスはゆっくりと目を覚ました。

「私・・・。気を失っていたの・・・？朝・・・・。」

ゆっくりと体を起こし、周りを見渡す。床にはつい昨夜まで動いて話をしていた、チェシャ猫達の体が倒れていた。その中にはもう意識等無く、ただの人形として。

「そうか・・・私・・・皆を消したのね・・・・。私の中に居た・・・意識達を・・・・。」

一人ポツンと床に座るアリス。その横に倒れていたうさぎの耳が、僅かに動いた。

「うさぎ？」

アリスはうさぎの体をユサユサと揺らした。

「うさぎ、起きて！」

アリスの声に気が付き、うさぎもゆっくりと目を覚まし、体を起こす。

「ア・・・リス・・・・。」

その姿を見て、アリスはホッと肩を撫で下ろした。

「よかった・・・・。」

うさぎは倒れている他の者達を見て、驚いた。

「これは・・・・！アリス！皆は？」

慌てるうさぎに、アリスはニコやかに言った。

「ただの人形に戻ったの。私が・・・消してしまったわ・・・・。」

アリスのその言葉に、うさぎは茫然とした。そして不思議そうに聞いた。

「でも・・・どうして僕だけ、まだ動いているの？」

「私が貴方だけは消さなかったからよ。」
ニコリと笑い言うアリスに、うさぎは更に不思議そうに聞く。
「僕だけ？どうして・・・。」
「気付いたから・・・。貴方だけは違ったって・・・。」
「気付いた・・・？」
訳が分からない顔をするうさぎの手を、アリスはそっと優しく握った。
「貴方は私を守ってくれたわ。それに・・・貴方は、私以外の人もちゃんと見ていた。」
「見て・・・？でも、アリスを守るのは、当然の事だよ。」
うさぎの言葉に、アリスは首を振った。
「違うわ。貴方は優しさで私を守ってくれた。ダムとディのチョコの時も、夕べのチェシャ猫の時も・・・。それにね、貴方だけは、ちゃんと他の子達とも仲良くしようとしていたわ。あの子達だけじゃない。ドジソン先生とも・・・。あの時・・・私は怒ってしまったけど、貴方は自分から先生の手伝いをしに行ったわ。ただ私だけを見ていたんじゃない・・・。」
うさぎの耳は垂れ下がり、悲しげな表情をした。
「怒っているの？アリス・・・。僕がアリスだけを見ていなかったから・・・皆みたいに・・・。」
アリスは大きく首を横に振り、強くうさぎを抱きしめた。
「違うの。嬉しいの！あの子達は私しか見ない変わりに、他の人は平気で傷付けたわ。でも貴方は、ちゃんと私を見てくれて、私と他の人との繋がりも大事にしてくれていた！」
「アリス・・・。」
「ごめんなさい・・・。ごめんなさいね・・・うさぎ・・・。」
アリスの目から涙が零れ出した。止めど無く溢れる涙に、うさぎはそっとその涙を拭ってニコリと微笑む。
「どうして謝るの？アリスが謝る事何か、何もないよ？」
優しく言ううさぎの言葉に、アリスは更に涙を流しながら言った。

「いいえ・・・。私・・・貴方に酷い事をしたわ・・・。今なら分かるの。貴方が来たばかりの頃、どうしてあんなにも酷い事をしていたのか・・・。」
「アリス・・・。僕は気にしてなんか・・・。」
「いいえ・・気にしなくちゃダメよ・・・。私は・・・夕べのチェシャ猫と同じだったの・・・。貴方が誰かに取られてしまうのが怖くて・・・私だけの物にしたくて・・・だから・・・だから鎖何か付けて・・・。」
ヒクヒクと泣くアリスの頭を、うさぎは優しく撫でた。
「いいんだ、アリス。そうだ！握手をしよう！」
突然のうさぎの言葉に、アリスの顔はキョトンとする。
「握・・・手？」
「そう！握手！アリスが言ったじゃないか！喧嘩をした時の仲直りは、握手だってね。」
ニコリと笑ううさぎに、アリスも涙を浮かべながら、ニコリと笑った。
「そうね・・・。そうだったわね。握手をして、仲直りをしましょう。」
二人は互いに手を取り合い、優しく、けれども強く握りあった。そして互いの顔を見合わせると、クスクスと笑い出した。
「ふふふっ・・・何だか照れ臭い感じね。」
「そうだね。ハハハッ。」
しばらくは二人笑っていたが、突然アリスは思い出したかの様に立ち上がり、そしてイソイソと洋服ダンスの方へと向かった。
「アリス、どうしたの？」
「ほら、洋服よ！やっぱり男の子が女の子の洋服を着ているなんて、オカシイわ！待ってて、確かこの中にしまって置いたと思うんだけど・・・。」
そう言いながら、タンスの中をガサガサとあさり始めた。
「アリス！別にいいよ！僕このままでも平気だし・・・。」

「駄目よ！ちゃんと男の子らしくしなくちゃ！」
タンスの中の洋服を引っ張り出しては放り出しと、初めにうさぎが着ていた洋服を必死に探すアリス。そんなアリスの様子を見て、うさぎはクスクスと笑った。
「何よ？何がおかしいの？」
不思議そうに首を傾げるアリス。
「だってアリス、すっかり忘れているんだもん。フフフッ・・・。」
更にクスクスと笑ううさぎに、アリスは不思議そうに聞いた。
「忘れている？何を・・・？」
「アリス、こんな洋服はもう要らないわねって、捨てたじゃないか。」
うさぎの言葉に、アリスの顔は真っ赤になった。
「やだっ！私ったら・・・そうだったわ！あぁ～どうしよう・・・ごめんなさい！」
両手を頬に当てながら、申し訳なさそうな顔をした。
「いいよ、気にしないでよ。僕ももう、この格好には慣れたし・・・と言うか・・・そんなに嫌いじゃないし・・・。」
うさぎも顔を赤くして言った。そんなうさぎに、今度はアリスがクスクスと笑い出す。
「やだっ・・・もしかして、あちら方面にでも目覚めたとか？ふふふっ。」
そんなアリスの言葉に、うさぎは慌てて言う。
「ちっ・・・違うよ！ほら・・・何と言うか・・・楽だからさ・・・。動きやすくて・・・。」
「そう？まぁいいわ、それでも着替え用として、別の洋服は用意しなくちゃいけないから・・・。そうだわ！ドジソン先生にでもお願いしましょう！」
名案だと言わんばかりに、両手を叩いてはしゃぐアリスの耳に、思わぬ返事が舞い込んで来た。
「そんな事なら、いつでも頼まれてあげられるよ。アリス君。」

突然のドジソンの声に驚いたアリスは、思わず後ろを向いてしまう。
「せっ！先生！ノックくらいしてよね！」
恥ずかしそうに言うアリスに、ドジソンはニコやかに笑う。
「あぁ・・・失礼。余りに楽しそうな話声がしたものだからね。邪魔をしては悪いと思って・・・。それにしても・・・これは一体どうなっているのだね？」
ドジソンは床に倒れ、ただの人形となってしまっていたチェシャ猫、ダム、ディの体を、一つづつ触り確認をしながら言った。
「完全に元の人形に戻って・・・いや、中身が無くなってしまっている・・・。」
そして今度はうさぎの方を向き、マジマジと見だした。
「君はいつも通りだね・・・。特に変わった様子はない様だが・・・。」
不思議そうに首を傾げ悩むドジソンに、アリスはサラリと夕べの事を言った。
「私が消したのよ。うさぎ以外の者全てをね。」
ハッキリとした口調で言うアリスに、ドジソンは驚いた様子だ。
「消した？君が？また何故？」
「必要なかったからよ。そして気付いたから！今の私の友達は、うさぎだけで十分だってね。」
強い口調で言うアリスは、何だか以前のアリスとは違い、どこか自身に満ち溢れていた。そんなアリスの姿に、ドジソンは穏やかに笑って言った。
「そうか・・・気付いた・・・のか。何があったのかは聞かないけれども、君が何かに気付けたのならば、それはよかったよ。」
頬笑みを浮かべて言うドジソンに、まるで子供を叱るかの様な口調でアリスは言う。
「先生！本当は知っていたのでしょう？あの子達がどこかオカシイって事を！」

迫るアリスに、ドジソンは少し困った様子で答えた。
「知っていた・・・とは？アリス君、一つ言っておくが、私は全てを知っている訳では無い。私は医院長先生に、君の中の意識達の体を作って欲しいと頼まれただけなのだよ。それを使って君の治療に役立てようと・・・。」
「じゃあ・・・黒幕は医院長って事？」
「黒幕って・・・はははっ、それは酷いなぁ・・・。きっと医院長も、最終的にどうなるかは分からなかったと思うのだよ。まぁ・・・これはあくまで私の見解なのだけれども・・・。」
言い掛けて少し悩むドジソンを促すかの様に、アリスは強く言う。
「なのだけれども？」
「あぁ・・・。医院長は、彼等を使って君の中に閉じ込めてしまっていた、様々な感情を呼び起こそうとしたのだと思う。他者との接触をさせる事で、社会生活上必要な役割、コミュニケーション、つまりは接し方の練習をさせようとしていたのではとね。」
「確かに・・・お陰様で色んな感情が目を覚ましたわ。で？」
腕を組みながら言うアリスの姿に、少しタジタジの様子で、ドジソンは続けた。
「まぁ君の場合、他者との接触が根本的に無理だったので、元々君の中に居た者達ならば、心を開くのでは・・・と考えた。」
「それであの子達に体を与えた、と言う訳ね。」
「いかにも！様々な特性を持った彼等と接する事で、君はその中で自身の役割を見出して行く。そして、その葛藤の中様々な感情が芽生え始める・・・と言った所だろうか。」
坦々と説明をするドジソンに、アリスは眉をひそめて言った。
「でも・・・アレ等は特性どころか、とんでもない歪みを持っていたって事を付けくわえて。」
アリスのその言葉に、ドジソンは慌ててメモ帳を取り出した。そしてその言葉を、メモをしながらふと疑問視をする。
「歪み？・・・それは・・・どう言う事だね？」

アリスは深く溜息を吐く。
「先生。やっぱり医院長が黒幕よ！先生も私も、騙されていたのよ。」
アリスの言葉に、更に不思議そうにするドジソン。しかししっかりとメモは取っていた。
「騙された？とは・・・一体・・・。」
「彼等は私の歪んだ感情から出来た物よ。そう・・・まるで自分のイヤな部分を、鏡に映して見ていた様だったわ。夕べそれがはっきりと分かった！」
「歪んだ感情から・・・。成程・・・。続けて。」
カリカリとメモと取りながら、ドジソンはアリスの言葉にじっくりと耳を傾けた。
「まずあのチェシャ猫。あれは私の強い独占欲の塊よ。欲しい物ならどんな手を使ってでも手に入れる・・・そんな事あるでしょ？それが強化された物。そしてダムとディ。あの二人は、私の主張願望。注目を浴びたいと言う・・・。それが過度にされた存在。そして・・・。うさぎ。彼は、私の恐怖から生まれた物よ・・・。捨てられてしまうと言う恐怖。だから嫌われない為なら、惜しみなく何だってやってしまう・・・。」
「ふむふむ・・・成程・・・。」
「でもね・・・。うさぎは私の中の優しさも持ち合わせていたの。嫌われてしまうのは怖い・・・でも、小さな繋がりでも大切にしたい・・・。そうね。嫌われるのが怖いからこそ、誰かに優しくしてあげたい・・・。結局臆病なだけだけれども・・・優しさって、そう言う臆病さから生まれるんじゃないかしら・・・。」
アリスは優しく微笑むと、うさぎの頭を軽く撫でた。うさぎは嬉しそうにしている。そんな様子も、ドジソンはきっちりとメモを取っていた。何処までも医者と言う所だ。
「成程・・・。確かに、君の言う通りだ・・・。待てよ？と言う事は・・・医院長は最終的にこうなる事が分かっていたのか？いやい

やっ・・・流石にそれは無いだろう・・・。つまりはこう言う事だ！自身の嫌な部分と向き合わせる事で、心の成長を促し、辛いトラウマからも立ち直させる・・・と言った所だろうか・・・。」
「多分・・・そうじゃないの？現にこうして、私は先生と普通にお話出来る様になった訳だし？」
そう言いながらも、何時もの素っ気なさで振る舞うアリスに、ドジソンはニコリと笑った。
「そうだね。君は十分立ち直ったね。少々荒療法だったようだけれども・・・気付いているかい？君は初めて、私の前で笑顔を見せてくれた。」
ドジソンの言葉にハッとなったアリスは、自分でも気付かなかった事を指摘され、恥ずかしくなりまたも後ろを向いてしまう。
「そっ・・・そうだったかしら？覚えてないわ！」
照れ臭そうに言うアリスに、うさぎとドジソンはクスリと笑う。
「そっ！それより先生！先生の事だから、どうせもう女王の体も用意してるんでしょ？」
「あぁ。君の言う通りだよ。女王の体はもう用意出来ている。」
クスクスと笑いながら言うドジソンに、アリスはクルリと体をドジソンの方へと向け、ハッキリと言った。
「なら、処分して！」
アリスの言葉に、少々驚いた様子でドジソンは聞く。
「処分？何故だい？」
そんなドジソンの言葉に、アリスは自信に満ちた声で言った。
「私にはもう、必要無いから。」
穏やかな笑みを見せるアリスの姿を見て、ドジソンもまた穏やかに微笑んだ。
「そうだね、君には、うさぎ君が居れば十分だね。」
アリスとうさぎは顔を見合わせ、しばし見つめ合った。お互いの存在を確認し合うかの様に。
「しかし、まだ退院は出来ないよ。君はまだ、外への扉を開けただ

けに過ぎない。」
凛とした声で言うドジソンの言葉に、アリスは真剣な表情をした。
「分かっているわ。このまま病院を出ても、またすぐに逆戻りでしょうね。私がこうして普通に接する事が出来るのは、今の所うさぎとドジソン先生だけですものね。」
「分かっていてくれているのなら、助かるよ。何より私の名前もあった事が、嬉しいな。」
ははははっと笑い、頭をかくドジソンを見て、アリスはクスリと笑った。
「よしっ！それでは私は、うさぎ君の新しい洋服でも調達をしてくるかな。」
「それと、ここに転がっている3体の人形の処分もお願いね、先生。」
そう言って指を指すアリスの矛先を見たドジソンは、ガックシと首をうな垂れた。
「また・・・この重い人形を運ぶのか・・・。3体も・・・。」
はぁ～と深い溜息を吐くドジソンに、うさぎがニコリと笑い言った。
「僕も手伝います。二人なら、少しは楽でしょ？いいよね？アリス。」
アリスもニコリと笑い言った。
「ええ、いいわよ。先生を手伝ってあげて。」
うさぎの申し出に、ドジソンは嬉しそうにうさぎの手を握り、大きくブンブンと何度も振る。
「あっ！ありがとう！いやあ、本当に大変だったのだよ！この人形を一人で運ぶのは・・・。医院長は全く手伝ってはくれないし・・・。」
何だか涙ながらに言うドジソンに軽く引いてしまっていたうさぎだったが、アリスはそんな光景を楽しそうに見つめた。
「ああ！それならば、早速カートを持って来るよ。少し待っていて

くれたまえ！」
上機嫌で病室を後にするドジソンの姿に、アリスとうさぎはクスクスと笑う。
「いい先生だね、アリス。」
「ええ、そうね。」
互いに顔を見合わせると、ふたりはまたクスクスと笑った。そしてアリスはうさぎの手を取り、窓へと向かった。
「見て！とてもいいお天気。」
嬉しそうに外を眺めるアリスに、うさぎも自然と笑みが零れる。
「そうだね。こんな日に散歩でもしたら、とても気持ちいいだろうね。」
アリスとうさぎは手を繋ぎながら、ジッと外を眺める。ゆっくりと窓を開けると、外からは心地のいい風が病室の中へと吹き込んだ。
「私ね、ここを出たら、やりたい事が沢山あるの。」
風に運ばれ、花の香しい匂いがした。
「いい香り・・・何の花かしら。」
気持ち良さそうに目を閉じて風を浴びるアリスを、うさぎは優しく見つめた。
「アリスは一番最初に、何がしたい？」
うさぎの質問に目を開けると、ゆっくりとうさぎの方へと顔を向け、穏やかに言う。
「そうね。貴方とデートがしたいわ。お洒落をして、美味しいランチを食べて、歌劇を見るの。ショッピングでもいいわね。」
風に揺られるアリスの髪を優しくうさぎは撫でると、アリスの頬にキスをした。
「僕もだよ。アリス。」
そしてお互いに手を取り合うと、二人は見つめ合い、額を互いに寄せ合った。
「ねぇうさぎ・・・。私、まだ貴方に言ってなかった事があるの。」
「何？」

囁き合う様に話す二人に、また心地よい風が吹く。
「私と、友達になってくれる？」
静かに言うアリスの言葉に、うさぎも又静かに答えた。
「喜んで・・・。」

エピローグ

「よしっと・・・。後は、女王の体だけだな。」
アリスの病室から運び出した、チェシャ猫、トゥイードルダム、トゥイードルディの3体の体を処分し終えたドジソンは、まだ箱の中に納められていた女王の体を、ゆっくりと箱の中から取り出した。
「ふぅ・・・。せっかくの良い出来だったのだが・・・仕方がない。」
名残惜しそうに女王を見つめ、その体を燃え上がる焼却炉の中へと入れようとしていた時だった。
「待ちたまえ、ドジソン君。」
背後から聞こえて来たその声に、ドジソンは思わず驚いた。
「いっ！医院長先生！いらしたのですか？」
慌てて女王の体を床に置くと、ドジソンは軽く医院長に会釈をし、唸る焼却炉の蓋を閉めた。
「君の報告書を読ませて貰ったよ。」
静かな声で言う医院長は、何だか普段とは違う雰囲気を可持ちだしていた。
「恐縮です。」
そんな医院長の雰囲気を悟ったのか、ドジソンは何時も以上に緊張をした様子であった。
「実に面白い結果だった。何せ私自身、この治療法の最終段階がどう転ぶか等、分からなかったのだからね。」
「はっ・・・はぁ・・・。私もです・・・。」
どこと無く重苦しい空気が漂う中、ドジソンはアリスの言っていた『黒幕は医院長』と言う言葉が頭に浮かび、思い口をゆっくりと開いた。
「あの・・・。医院長は、もしやアリス君の中に居た意識達の正体を、知っていたのでは無いのでしょうか？」

ドジソンのその言葉に、しばらく沈黙が続く。まるでこちらを睨みつけているかの様に見える医院長の目に、ドジソンはゴクリと生唾を飲み込んだ。
「ふふっ・・・ふふふふ・・・。」
不敵に笑い出す医院長に、ドジソンは少し後退りをする。
「フハッハッハッハッ。いやいやっ。まさか！分かっていたのなら、こんな苦労等しないよ。分かっていたのならば、様々な心理療法を使い、治療が出来たのだからね。」
大口を開けて笑う医院長を見て、何時もの医院長だとほっと安心をしたドジソンも、ハハハッと笑った。
「そっ・・・そうですよね！ハハハッ。いやっ、失礼しました。まぁ何にせよ、アリス君は随分と改善の兆しを見せていますよ。現に、もうこの人形も要らないと、自ら言い出したのですから。」
アリスの様子を嬉しそうに語るドジソンだったが、医院長は一つ咳払いをしてから言い出した。
「コホンッ！実はその事なのだがね、ドジソン君。他の人形は、もう既に処分をしてしまった様なので仕方がないが・・・。その残りの1体は、残して置きたまえ。」
突然の医院長の言い出しに、茫然とするドジソンであった。
「残す・・・と？何故でしょうか？彼女には、もう必要の無い物です。」
「うむ・・・それはだね、ドジソン君。まぁ・・・何だ・・・その、保険と言う所だよ。」
言葉を濁しながら言う医院長に、ドジソンは首を傾げた。
「保険・・・ですか？それは、また彼女が必要とする可能性が有るからでしょうか？」
「うむ・・・まぁ、そんな所だろう。」
ソワソワとしながら言う医院長に、ドジソンは腑に落ちない部分があったが、医院長がそう言うのならば、と渋々了承をした。
「はぁ・・・。分かりました・・・。では、この人形は私の製作室

にでも置いておきます。」
　女王の体を箱の中に戻すと、ドジソンは箱をカートの上へと載せた。
「あぁ！ドジソン君！くれぐれも、誰にも見付からない場所に隠して置きなさい。まだ動いてもいないこの人形を、誰かに見られる訳にはいかないのだからね。」
　医院長のその言葉に、ドジソンは身を引き締めて言った。
「心得ております！」
「それから、腐食にも十分気を付ける様にしてくれたまえ。」
「はい。無論です！」
　キビキビと返事をするドジソンに、医院長はホッと肩を撫で下ろした。
「それからもう一つ！耳やら尻尾やらと・・・余計な物は付けなくてもよい。」
「はぁ・・・。しかし、出来る限り彼女のイメージ通りにと思いまして・・・。それに、個人的にも気に入っていますし・・・。」
　ハハハ、と頭をかくドジソンに対し、医院長は半分呆れた様に怒った。
「君の個人的趣味等どうでもよい！」
　医院長のその言葉に、ドジソンは思わず何度も頭を下げる。
「はっはいっ！申し訳ありません！」
　そして一つ溜息を吐くと、医院長はドジソンの近くへと詰め寄り、小声で話した。
「あの人形の正体は、決して人に知られてはならんのだよ。もし他の者に知れたら、君だけで無く、材料調達をしている、私までもタダでは済まん！しかし君が処分をした失敗作では無く、成功品にも近いうさぎの様な人形を何体も作る事が出来れば、我々の名は歴史に刻まれる！その事だけは、忘れずに心に刻んで置きなさい！」
　医院長の言葉に身を改めて引き締めると、ドジソンは背筋を伸ばし言った。

「承知しております！」
医院長は無言で頷くと、その場を後にした。ドジソンもまた、箱の蓋を固く閉ざすと、カートを押しながらその場を後に、製作室へと向かって行った。

「ねぇうさぎ、そう言えば、貴方の名前『うさぎ』って言うのも変よね。」
「そう？僕は呼ばれ慣れてるから、何とも思わないよ？」
「でもやっぱりちゃんとした名前があった方がいいわ・・・。そうね・・・何がいいかしら？」
「アリスが呼ぶ名なら、何でもいいよ。」
「そう？じゃぁ・・・。・・・レジ・・・ナルド・・・。」
「アリス？」

「レジナルド！貴方の名前は、今日から『レジナルド』よ。」

「うん！アリス。」

～ＥＮＤ～

エピローグ（後書き）

本当ならこの続きも書く予定でしたが、同人の話が突然なくなり、書く気が失せてしまったので、書いていません。
今読み返すと、未熟な文章だと自分でも思いますが、最後まで読んで下さりありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6662y/

病棟アリス

2011年11月20日03時21分発行